

徳島市埋蔵文化財調査報告書第14集

阿波国府跡第3次調査概報

— 1984 年度 —

1985

徳島市教育委員会

阿波国府跡第3次調査概報

— 1 9 8 4 年 度 —

1 9 8 5

徳 島 市 教 育 委 員 会

序

阿波国府は、奈良時代の中央集権化の中で、地方行政官庁として造営されたものです。

阿波国府は、徳島市国府町府中の大御和神社を中心に展開したといわれますが、長い歴史の経過の中で幾多の変遷を繰り返し、威容を誇ったと思われる奈良・平安時代の府域や政庁の建物は地下深く眠ってしまったようです。

昭和57年度より6ヶ年計画で、国庫補助を受けて、県下でも最大級の重要遺跡である阿波国府跡の府域及び政庁の規模・構造などの確認調査を実施しております。

本遺跡の調査によって、該期の歴史的環境の復元あるいは文化と技術の伝播状態を把握する上において貴重な資料が提供されるものと思われます。

最後に、調査にあたりまして、ご指導・ご助言をいただきました水野正好・田中琢両先生をはじめ、地元の研究者の方々とともに、地元及び地権者の方々の真摯なご助力に対して深く感謝いたします。

昭和60年3月30日

徳島市教育委員会

教育長 七條 力

例　　言

- 1 本書は、国庫補助を受けて、徳島市国府町府中字田渕の大御和神社の周辺を中心に実施した「阿波国府跡」の重要遺跡確認調査（第3次調査）の概要報告である。
- 2 発掘調査は、徳島市教育委員会が主体となり、「阿波国府跡発掘調査団」を編成して、昭和60年1月29日から3月末日まで実施し、事務処理については徳島市教育委員会社会教育課が担当した。
- 3 検出遺構の実測図については、調査員・調査補助員が分担した。遺物整理については、調査員・調査補助員の協力を得て実施し、遺構・遺物の写真・実測及び製図については、一山 典が担当し、一部滝山雄一の協力をえた。
- 4 本書の執筆・編集は、滝山雄一の協力をえて、一山 典が担当した。

目 次

序

第1章	位置と歴史的環境	1
第2章	調査に至る経過	6
第3章	調査成果の概要	
	I 検出遺構	9
	II 出土遺物	17
第4章	小結	25

挿 図 目 次

第1図	阿波国府跡と周辺の遺跡	2
第2図	阿波国府跡調査地点周辺地形図	8
第3図	D地区グリッド配置図	10
第4図	D地区遺構配置図	11
第5図	D地区東壁・西壁断面図	12
第6図	D地区南壁断面図	13
第7図	D地区北壁断面図	13
第8図	S D - 08・09・10・11・12溝実測図	14
第9図	S D - 13溝実測図	15
第10図	S K - 19土塙墓実測図	16
第11図	S K - 20・21土塙実測図	16
第12図	出土土師器実測図	18
第13図	出土土師器実測図	19
第14図	出土須恵器実測図	20
第15図	出土須恵器・黒色土器・瓦質土器・瓦器実測図	21
第16図	出土磁器実測図	22
第17図	出土土鍤・轆羽口実測図	22
第18図	出土鉄製品実測図	23
第19図	出土古錢拓影図	23
第20図	出土丸瓦・平瓦拓影図	24

図 版 目 次

図版1	調査地点周辺現況	
図版2	D地区調査地点遠景	北より
	D地区検出遺構北半部	東より
図版3	D地区検出遺構北半部	東より
	D地区検出遺構南半部	東より
図版4	D地区東壁北半部	西より
	D地区東壁南半部	西より
図版5	D地区西壁北半部	東より
	D地区西壁南半部	東より
図版6	S D - 08・09・10・11・12溝	北より
	D地区北壁(S D - 08溝)土層	南より

第1章 位置と歴史的環境

吉野川の支流である鮎喰川によって形成された沖積平野の末端付近に位置する徳島市国府町（左岸）と名東町を中心とする一帯（右岸）は、縄文時代～古墳時代の遺跡から奈良・平安時代の寺院跡・瓦窯跡などの多数の遺跡が存在し、阿波の原始・古代の中心地であった。

代表的なものを列挙すれば、鮎喰川左岸の矢野遺跡・南内遺跡・奥谷1・2号墳、宮谷古墳、矢野古墳、阿波国分寺跡、阿波国分尼寺跡（名西郡石井町）など、鮎喰川右岸の名東遺跡、鮎喰遺跡、庄遺跡、南庄遺跡、節句山1・2号墳、八人塚古墳、穴不動古墳などの集落跡、銅鐸・銅劍出土地、古墳群、寺院跡などの重要な遺跡が存在し、一部に条里の残存も認められる。

これらの遺跡の一つと、鮎喰川左岸の徳島市国府町府中字田渕の大御和神社周辺の沖積低地上に、「阿波国府跡」が展開したといわれる。

阿波国府の歴史的背景を考える上からも、鮎喰川左岸を中心とした沖積平野及び周辺丘陵の主要遺跡の概要について概略的にみておきたい。

縄文時代には、鮎喰川右岸の南佐古淨水場遺跡（三谷遺跡）から縄文時代後期の土器片、庄町1丁目の庄遺跡一日赤血液センター地区から縄文時代晚期の土器片が検出されている程度であり、⁽¹⁾鮎喰川左岸においては、現状では該時代の明瞭な遺跡・遺物は発見されていない。

弥生時代には、この沖積平野にも遺跡が展開し、国府町の矢野遺跡（中・後期中心）、名東町の名東遺跡（前期～後期）という二大集落が形成される。⁽²⁾

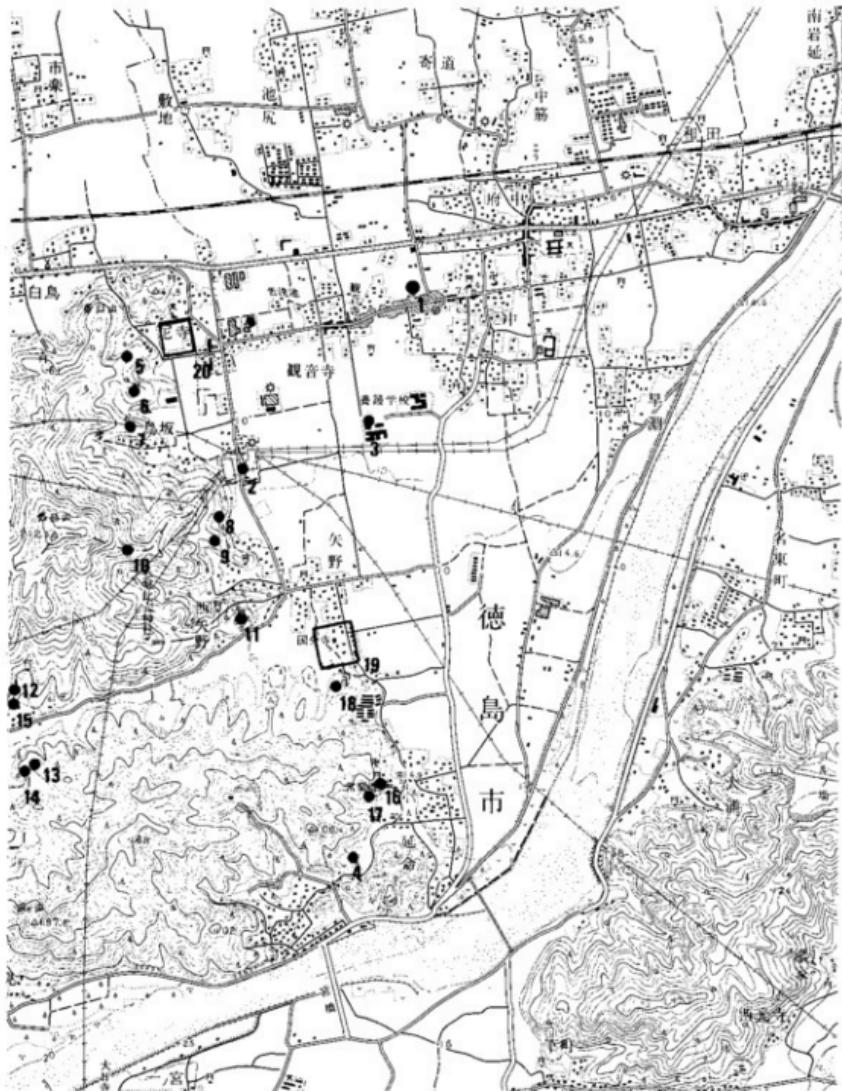
矢野遺跡は、四国電力の国府変電所地区と国府養護学校地区を中心に緊急調査が実施されている。前者では、昭和51年6月からの数回にわたる調査が実施され、竪穴住居跡18・土壙21・溝14・壺棺3・柱穴群などが検出され、弥生土器（中・後期中心）・土師器（古式土師器含む）・須恵器・土製紡錘車等の土製品類・石鍬・打製石斧・磨製石斧・打製石庵丁等の石製品類とともに、若干の古錢等の金属製品類、平瓦片を中心とする瓦塊類などが出土している。後者からは、竪穴住居跡2・掘立柱建物跡1・土壙30・溝12・ピット570などが検出され、弥生土器・銅鏡・鉄斧・石鍬・石製紡錘車等が検出されている。⁽³⁾

弥生時代中期以降の重要な遺跡として、農耕祭祀との関連が強いといわれる銅鐸・銅劍出土地があり、該地域周辺では国府町の源田遺跡があげられる。

源田遺跡は四国靈場第16番札所常楽寺の南西約350mの溜池西岸の緩斜面で、海拔約30mに立地し、昭和23年3月、六区画袈裟擣文銅鐸3個と中細形銅劍1口が発見された。第1・2・3号銅鐸の鐸高はそれぞれ、52cm、41.5cm、38cmであり、銅劍は長さ54.3cm、幅6.15cmを測る。⁽⁴⁾銅鐸と銅劍が伴出しており、「銅鐸文化圏」と「銅劍・銅鋒文化圏」の接点として重要な遺跡である。

古墳時代には、鮎喰川下流域の平野部には、前述の矢野遺跡・名東遺跡及び阿波国分寺跡の下層の南内遺跡などから該時代の遺構・遺物が検出されている程度であり、集落跡については今後の調査の進展が俟たれる。

古墳時代における鮎喰川下流域の平野部の遺跡は、前述の矢野遺跡・名東遺跡とともに鮎喰町の鮎喰遺跡などから該時代の遺構・遺物が検出されているが、集落跡については今後の調査の進展が



第1図 阿波国府跡と周辺の遺跡

縮尺 2万5千分の1

- | | | | | |
|-------------|-----------------|------------------|------------|------------|
| 1 阿波国府跡 | 2 矢野遺跡—国府變電所地区— | 3 矢野遺跡—国府費譲学校地区— | | |
| 4 源田遺跡 | 5 ひびき岩古墳群 | 7 内谷古墳群 | 8 矢野古墳 | |
| 9 奥谷1号墳 | 10 奥谷2号墳 | 11 宮谷古墳 | 12 内ノ御田1号墳 | 13 内ノ御田2号墳 |
| 14 内ノ御田須恵器跡 | 15 内ノ御田瓦窯跡 | 16 常楽寺跡 | 17 常楽寺瓦窯跡 | 18 瓦谷瓦窯跡 |
| 19 阿波國分寺跡 | 20 阿波國分尼寺跡 | | | |

俟たれる。一方、古墳については、平野部に続く丘陵一帯に多数築造されているが、沖積平野上に立地する古墳は現状では皆無となっている。

鮎喰川下流域で最古の古墳と考えられているのは、鮎喰川右岸の名東町の筋句山1・2号墳であり、1号墳は石蓋盤棺、2号墳は竪穴式石室をしてらえた内部主体を有し、3世紀末～4世紀前半に位置づけられ、古墳発生を考える上で重要である。次に古く位置づけられるのは加茂名町の八人塚古墳であり、徳島県下では数少ない積石塚の前方後円墳（全長約60m）で、内部主体は竪穴式石室と考えられ、4世紀前半に位置づけられている。

鮎喰川左岸では、国府町西矢野に奥谷1・2号墳、官谷古墳などが気延山古墳群の一角に築造されている。

奥谷1号墳は全長約50mの前方後方墳であり、内部主体については不明であるが、裾部に埴輪列を有し、埴丘の形態や埴輪の製作年代（川西分類Ⅱ期）などにより、4世紀後半に比定され、八人塚古墳に後続するものと考えられている。

奥谷2号墳は気延山（海拔212.3m）の東方約360mで海拔約120mの尾根上に立地する。全長約18mの積石塚で前方後円墳の形状を示し、内部主体には竪穴式石室2・箱式石棺1があり、第1内部主体の竪穴式石室より土師器小片、鉄鋤等の鉄製品が出土している。埴丘の形態、竪穴式石室の構造及び出土遺物などにより4世紀後半の年代が比定され、奥谷1号墳に先行するものと思われる。

官谷古墳は全長約40mの前方後円墳であり、開墾のため後円部が一部削平されている。内部主体、出土遺物ともに不明であるが、4世紀後半～5世紀初頭の年代が与えられている。

鮎喰川下流域における丘陵には多数の後期古墳が存在するが、発掘調査等がなされ、その規模・構造・内容・様相・性格等が判明しているのは数例であり、いずれも内部主体は横穴式石室である。

鮎喰川下流域の周辺丘陵で確認されている後期古墳は気延山東麓と眉山北西麓を中心に展開し、それぞれ、気延山古墳群、名東古墳群（名東山古墳群）と呼称されている。前者では県指定史跡の矢野古墳、後者では穴不動古墳が代表的なものである。

矢野古墳は気延山東麓の丘陵端付近に位置し、平野部との比高差は約10mとなっている。直径約15mの円墳で、内部主体は左・右ともに約30cmの袖を有する横穴式石室であり、南側に開口部を設けている。玄室長3.3m、玄室幅2.4m、玄室高2.5m、玄門長0.3m、玄門幅1.9m、玄門高1.9m、羨道長3.9mを測り、6世紀末～7世紀初頭の年代が比例され、穴不動古墳より若干古く位置づけられる。

歴史時代に入ると、鮎喰川下流域の左岸一帯を中心に、阿波國分寺跡、阿波國分尼寺跡、阿波國府跡などが展開する。

阿波國分寺跡は大御和神社の南南西約1.5kmの四国薈場第15番札所の現國分寺を中心に展開したといわれ、海拔11m前後に立地している。昭和53年度からの3次にわたる発掘調査等により、寺域の東・西・南・北限の一部確認、中心伽藍の一部などが検出されている。出土遺物としては、土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器・陶磁器片などとともに土馬などがあげられる。瓦塊類としては軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・熨斗瓦・隅切瓦・丸瓦・平瓦・埠・壁埠などが発見されている。⁽⁹⁾

阿波國分尼寺跡は大御和神社の西方約1.2kmに位置し、海拔10m前後に立地している。昭和45・46年度の発掘調査により、金堂・北門・築地・溝等の遺構が検出されている。寺域は158m(大平尺1町半)四方で、伽藍中軸線は真北から西へ約11度ぶれ、条里地割とほぼ一致していることが確認されている。金堂跡は東西(桁行)約28m、南北(梁行)約18mで長さ約3m、幅約50cmの凝灰岩の敷石や地覆石の地盤などが検出されている。出土遺物としては、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・線釉陶器・青磁・白磁等の土製品類とともに、少量の鉄製品等の金属製品類、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦・埠等の瓦埠類などが検出されている。¹⁰

阿波國府跡は海拔7m前後の沖積低地上に立地する「大御和神社」を中心に展開したといわれ、從来より歴史地理学的研究を中心に成果が発表され、府域の規模・位置推定などがなされている。明治41年発刊の『徳島縣名勝案内』に「國司廳址」として紹介されたのをはじめ、阿波國府跡の位置推定等が中井伊与太・小川国太郎・秋山泰・藤岡謙二郎・三好昭一郎・美馬弥藏氏等により発表されている。福井好行氏は阿波國府跡推定地と周辺部の条里の研究及び地名からの研究、木下良氏¹¹は國府と条里に関する米倉説の再検討による阿波國府跡ほかの位置推定等の研究、米倉二郎氏は國府の等級の昇格により國府の規模も変容したという研究成果を発表された。これらの研究成果等をふまえ、阿波國府跡の重要性が指摘され、昭和58年度より重要遺跡確認調査が実施されている。検出遺構としては、掘立柱建物・柱列・溝・土壤(土壤墓)・井戸・石組遺構などが存在する。出土遺物としては、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・土鍤・陶碗・坩埚等の土製品類、石鍋・石硯・砥石等の石製品類、鉄製品・古錢等の金属製品類、丸瓦・平瓦等の瓦埠類などがあげられる。¹²

以上のほかにも、觀音寺跡・西蓮寺跡・常楽寺跡などの寺院跡とともに、瓦谷瓦窯跡・常楽寺瓦窯跡・国分寺瓦窯跡(平窯跡)などの瓦窯跡などの存在も知られている。

註

- (1) 森敬介「徳島市水道三谷濾過池に於ける原始濁木舟発見の顛末」上・下『歴史地理』18-1・5 1926・1・5
徳島県教育委員会文化課『庄遠跡現地説明会資料』 1983・1
- (2) 天羽利夫・岡山真知子「鈴喰川下流域における弥生文化の展開—序論—」『徳島県博物館紀要』第5集 1974・3
一山典「名東遺跡調査成果の概要」『徳島市史だより』第4号 1978・3
- (3) 徳島県教育委員会『矢野國府変電所遺跡緊急発掘調査概報 第3次調査』『徳島県文化財調査概報 1976年度』 1978・3
徳島市教育委員会(一山典)「矢野遺跡(第5次)」『徳島市文化財だより』No.1 1978・9
徳島県教育委員会文化課『矢野遺跡—國府養護学校地区—現地説明会資料』 1982・5
徳島市教育委員会『弥生時代の徳島市』 1983・11
- (4) 三木文雄「阿波國源田出土の銅劍銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第36卷第2号 1950・7
- (5) 天羽利夫「阿波忌部の考古学研究」『徳島県博物館紀要』第9集 1978・3
川内宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64卷第2号 1978・9
- (6) 一山典「奥谷2号墳調査概要」「しぶき」No.83 1980・7

- (7) 天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集 1978. 3
- (8) 天羽利夫「終末期の古墳二基一穴不動古墳・矢野の横穴式古墳一」『徳島県博物館報』No14 1972. 3
- (9) 徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第1次調査概報—1978年度—」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第4集 1979. 3
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第2次調査概報—1979年度—」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第7集 1980. 3
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第3次調査概報—1980年度—」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第9集 1981. 3
- (10) 徳島県教育委員会・石井町教育委員会「阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報」 1971. 3
徳島県教育委員会・石井町教育委員会「阿波国分尼寺遺跡（第2次）緊急掘調査概報」 1972. 3
- (11) 石毛賛之助「國司廳址」「阿波名勝案内」 1908. 2
「國府序址」「徳島縣史蹟名勝天然記念物調査報告」第一輯 1929. 3
中井伊与太「阿波國府址」「徳島毎日新聞」新年号 1938. 1
小川国太郎「國司庁とその遺跡」「名東郡史」 1960. 11
秋山 泰「國司の序」「徳島県史」第1巻 1964. 3
藤岡謙二郎「四国の國府」「國府」 1969. 12
三好昭一郎「律令國家の成立と徳島地方」「徳島市史」第一巻 総説編 1972. 10
美馬弥藏「阿波の國府址について」「ふるさと阿波」83 1975. 6
- (13) 福井好行「阿波の國府と其附近の条里」「徳島大学学芸学部紀要」社会科学9 1959. 9
福井好行「阿讚地名考 序説」「阿波の歴史地理」第三 1972. 2
- (14) 木下 良「國府と条里との関係について」「史林」50巻5号 1967. 9
- (15) 米倉二郎「國の昇格と國府の変容」「史林」66巻1号 1983. 1
- (16) 徳島市教育委員会「阿波國府跡第1次調査概報—1982年度—」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第12集 1983. 3
徳島市教育委員会「阿波國府跡第2次調査概報—1983年度—」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第3集 1984. 3

第2章 調査に至る経過

阿波国府跡については、前述のごとく、従来より多くの研究成果が発表されているが、主として歴史地理学分野での位置及び規模等の推定を中心としており、徳島市国府町府中字田渕に所在する大御和神社を中心に展開したといわれている。

これらの研究成果と昭和56年度の国府中学校建替工事に伴う事前の緊急調査及び分布調査の成果等より、「阿波国府跡」の重要性が再認識され、昭和57年度より6ヶ年計画の予定で「重要遺跡確認調査」として、国庫補助を受けて実施している。

第1次調査（昭和57年度）では、大御和神社境内（A地区）を4地区に分け、AⅡ・AⅣ地区を中心に約300m²を調査対象面積とした。検出遺構としては、掘立柱建物2棟・溝4条・柱列2・土壙1414・井戸1・石組造構1などがあり、出土遺物としては、土製品類・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・土鍤・陶硯など、石製品類・石鍋・石硯など、金属製品類・鉄製品・寛永通寶など、瓦埠類・丸瓦・平瓦などがあり、平安時代後期以降に比定されるものが大部分である。

第2次調査（昭和58年度）では、大御和神社の東側（B1・B2地区）と北西側（C1地区）の約300m²を調査対象とした。検出遺構としては、掘立柱建物1棟・溝3条・柱列1・土壙（土壙墓含む）4などがあり、出土遺物としては、土製品類・土師器・須恵器・陶磁器・土鍤など、石製品類・石鍋・砥石など、金属製品類・鉄小刀・古錢など、瓦埠類・丸瓦・平瓦などがあり、平安時代後期以降に比定されるものが大部分である。

本年度（昭和59年度）の調査は、昨年度の調査に関連して、大御和神社周辺部の調査を実施することになりました。調査に先立ち、「阿波国府跡発掘調査団」を編成して、昭和60年1月29日～3月末日まで調査を実施した。

阿波国府跡調査団構成メンバー

顧問 沖野舜二（徳島県文化財保護審議会会長）
田中良平（徳島市文化財保護審議会委員長）
秋山泰（徳島県文化財保護審議会委員）
伊丹功（徳島市文化財保護審議会委員）
岩崎正夫（徳島市文化財保護審議会委員）
藤井哲四郎（徳島市文化財保護審議会委員）
前川武（徳島県教育委員会文化課長）

調査團長 七條力（徳島市教育委員会教育長）

調査副團長 湯浅明（徳島市教育委員会社会教育課長）

調査指導 水野正好（奈良大学部教授）

田 中 琢 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長)

調査主任 一山 典 (徳島市教育委員会社会教育課主事)

調査員 滝山 雄一 (徳島市教育委員会社会教育課事務員)

黒田 卓 (大阪学院大学O.B.)

大下 直樹 (立命館大学O.B.)

調査補助員 佐藤 清次・滝山 誠二・橋本 浩・板橋 トシ子
岩野 五十鈴・加納 ユキノ・久米 美津子・杉本 高子
武知 敏子・藤岡 君子・前田 ハマノ・身野 ミヤ子
矢本 アサ子・幸田 笑子

指導・助言 阿部 里司・天羽 利夫・石川 重平・岡山 真知子
河野 雄次・河野 幸夫・小林 勝美・島巡 賢二
新孝一・菅原 康夫・立花 博・福家 清司
松永 雅行・松永 住美

地元協力者 高木 豊・武田 忠次郎・手塚 嶽・友竹 清
板東 龜三郎・馬場 主計

事務局
局長 錙田 祐輔 (徳島市教育委員会社会教育課課長補佐)
次長 大津 衛 (徳島市教育委員会社会教育課主幹兼庶務係長兼文化振興係長)
局員 横谷 千代美 (徳島市教育委員会社会教育課主事)
切 輔 保子 (徳島市教育委員会社会教育課課員)

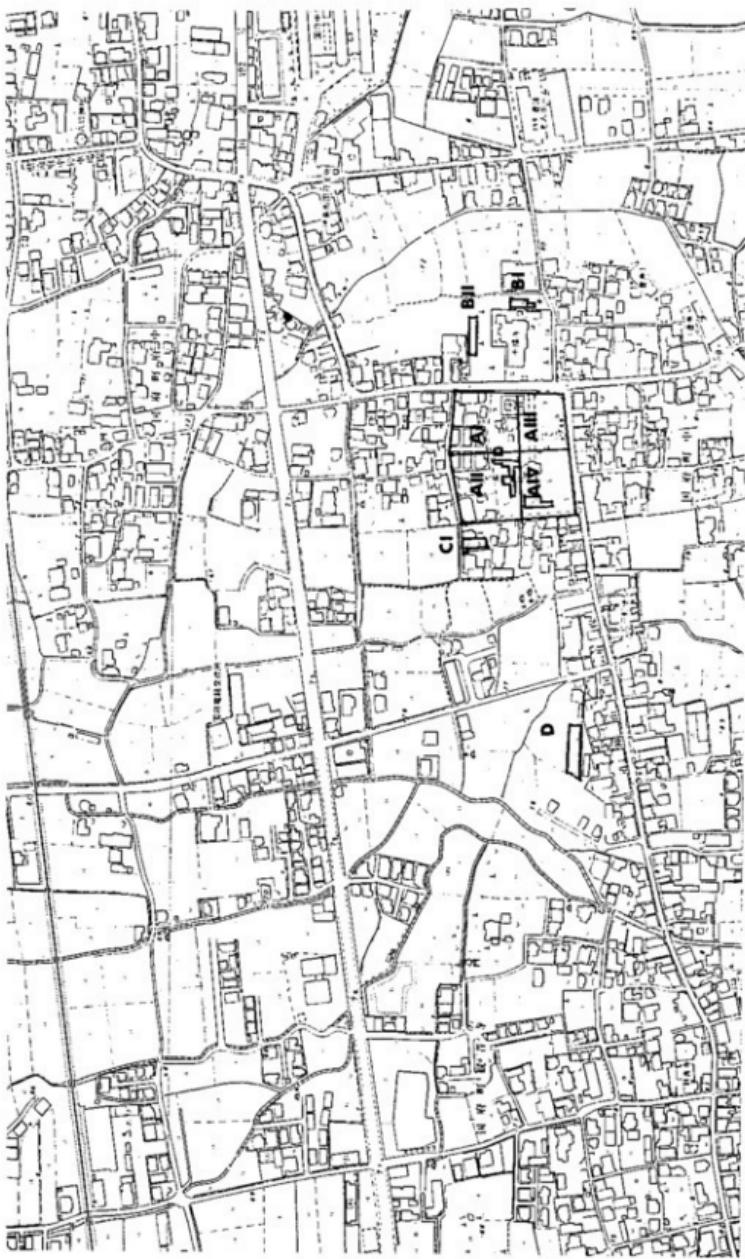
(順不同・敬称略)

調査にあたりましては、奈良大学の水野正好先生、奈良国立文化財研究所の田中 琢先生をはじめ地元の研究者の方々にも種々の御指導・御助言をいただきました。記して感謝の意を表する次第です。

また、土地所有者の馬場主計氏にはプレハブ仮設用地の提供など真摯な御援助・御協力と御理解をいただきました。なお、いちいち御芳名をあげられませんでしたが、多くの方々の御援助・御協力をいただきました。併せて感謝の意を表する次第です。

D 地区 A I ~ A IV 地区(第 1 次调查) B I B II 地区 C I C II 地区(第 2 次调查)

第 2 図 阿波國跡地點周辺地形図



第3章 調査成果の概要

本年度の調査（第3次調査）は、昨年度の調査成果をふまえて、大御和神社の西方約180mの地点で実施した。

今回の調査地点はD地区と呼称し、3m×3mのグリッドを設定して、西よりA～P、南より1～5とし、A1・B1グリッドなどと呼称した。

調査は3m×3mのグリッド法を基本とし、部分的にトレンチ法を併用して実施し、調査対象面積は約500m²である。

I 検出遺構

今回の発掘調査により検出された遺構は、溝5条・土壙墓1・土壙3とともに大小のピットがあげられる。

溝

S D - 08は、調査区の中央部や東よりのK 2～K 5グリッドを中心に検出された南北溝である。幅95～115cm、深さ約10cm前後を測る。若干の土師器・須恵器片が出土している。

S D - 09は、S D - 08に並行して走る南北溝であり、J 2～J 5・K 4グリッドにかけて検出された。幅約70～90cm、深さ約20～25cmを測る。若干の土師器・須恵器片が出土している。

S D - 10は、S D - 09に面接して走る南北溝であり、I 2・I 3・J 2～J 5グリッドにかけて検出され、S D - 09により上部が削平されている。幅約70～115cm、深さ約30～50cmを測る。若干の土師器片が出土している。

S D - 11は、S D - 10に西接して走る南北溝であり、I 2・I 3・J 2～J 5グリッドにかけて検出された。幅約80cm、深さ約40～50cmを測る。若干の土師器・丸瓦片などが出土している。

S D - 12は、S D - 11に並行して走る南北溝であり、I 3・I 4・J 4・J 5グリッドにかけて検出された。幅約1.4m、深さ約40cm前後である。若干の土師器片が出土している。

S D - 13は、調査区の北東隅から南壁の中央部や西よりにかけて検出された溝であり、K 2・L 2・M 3・N 4・O 4・O 5・P 5グリッドなどにわたっている。幅約60cm、深さ約30cm前後で、粘性の強い暗黄灰褐色土が充満していた。約20m分が検出されている。土師器・須恵器片などが出土している。

土 壙 (土 壙 墓)

S K - 19は、上部の擾乱が顕著であるために詳細は不明であるが、現状では長径約1.6m、短径約60cm、深さ約10cm前後の不整橢円形状プランを呈する土壙を掘り遺体を納めた土壙墓である。K 5グリッドの中央部や西よりに検出された。S D - 09により西側が削平されたようである。風化した人骨片と思われるものが検出された以外は出土遺物は存在しなかった。

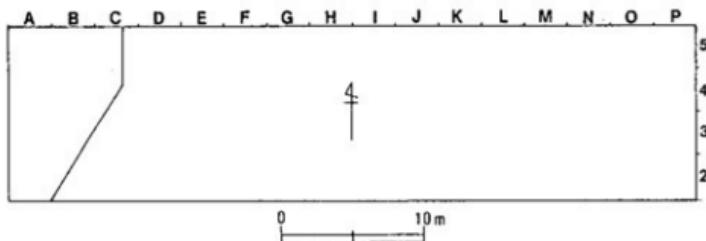
S K - 20は、長径約2.75m、短径約1.65m、深さ約5～10cmの不整橢円形状のプランを呈する土壙であり、北東壁中央部付近に接して、長径約80cm、短径約60cm、深さ約15cmの炭化物が充満した円

形状ピットを掘り込んでいる。

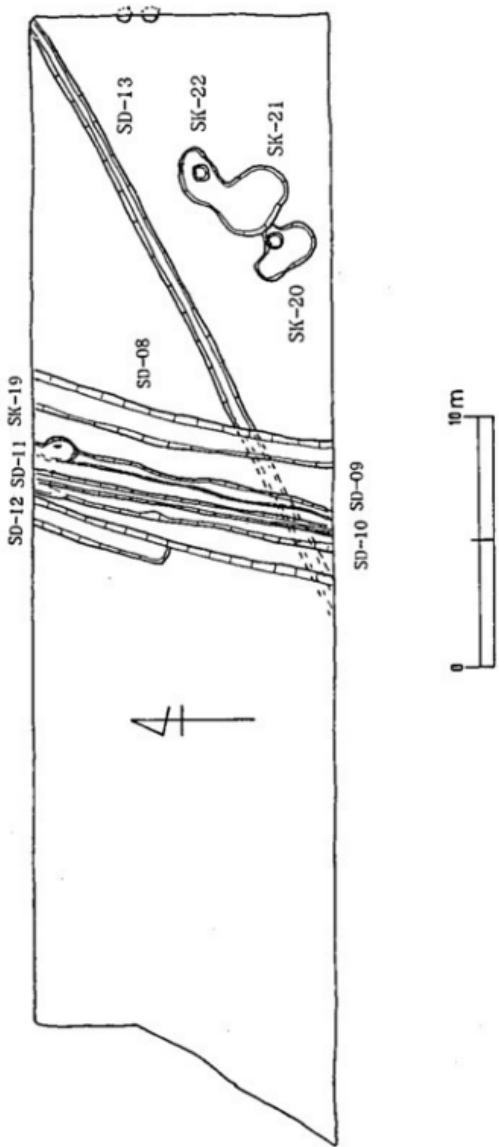
SK-21は、長径約3.1m、短径約1.7m、深さ約30~35cmの不整円形状のプランを呈する土壙である。SK-22により一部が削平されている。若干の土師器・須恵器片が出土している。

SK-22は、長径約2.3m、短径約1.5m、深さ約15cmの不整楕円形状プランを呈する土壙であり中央部やや南により、径約70cm、深さ約15cmの炭化物・灰が充満した隅丸方形状ピットを掘り込んでいる。若干の土師器片が出土している。

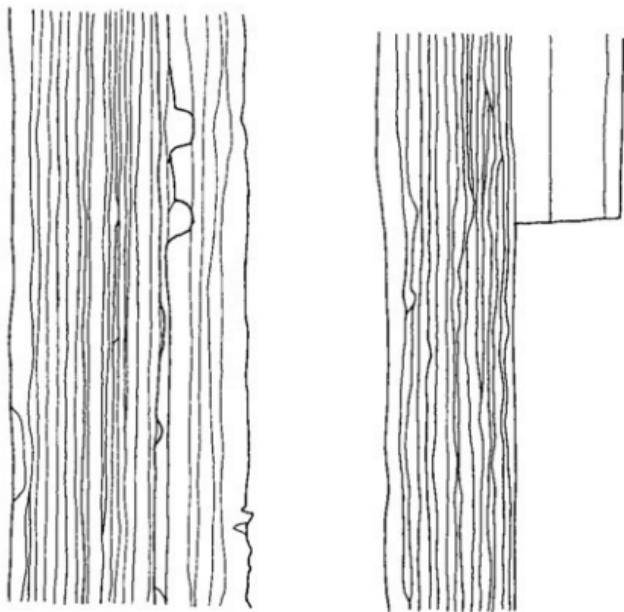
その他の遺構としては、若干のピットが検出されている。特に調査区の東壁に2つのピットと思われるもの（直径約40~50cm、深さ約30cm前後）が検出されており、さらに東側に続く可能性を有しており重要である。



第3図 D地区グリッド配置図

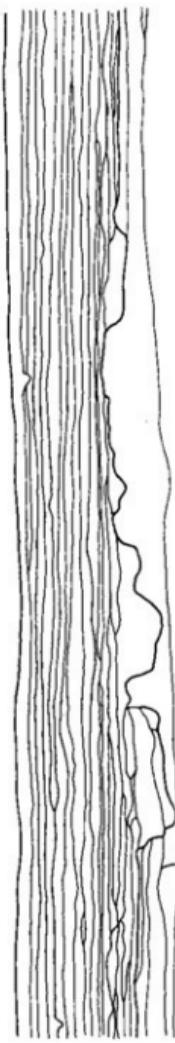


第5図 D地区 東・西壁断面図

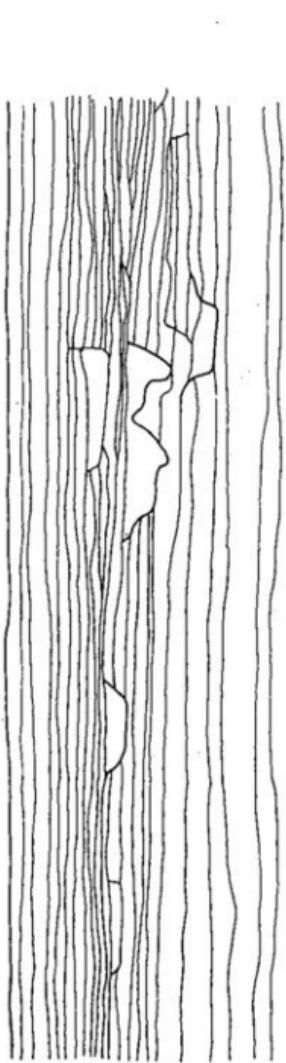


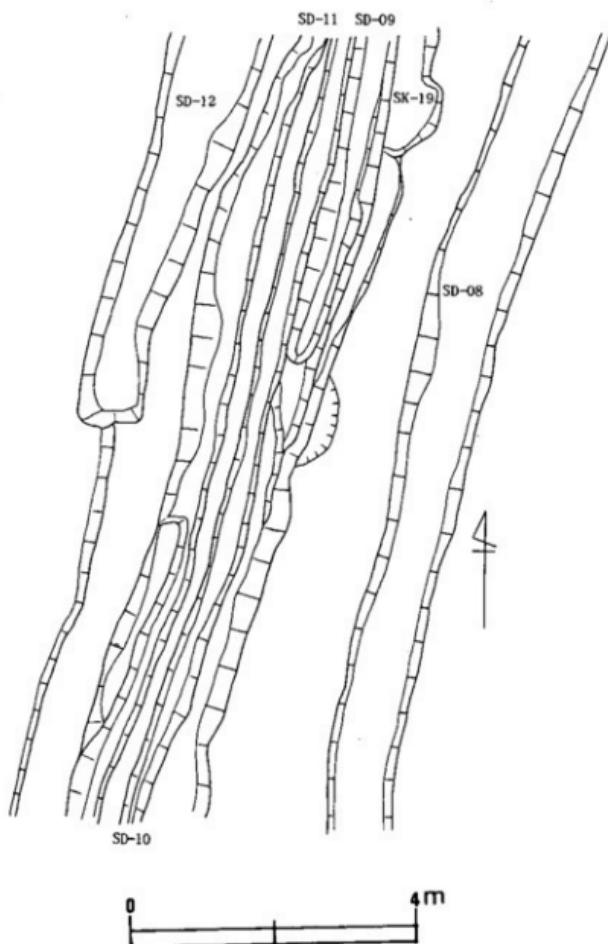


第7図 D地区 北壁断面図



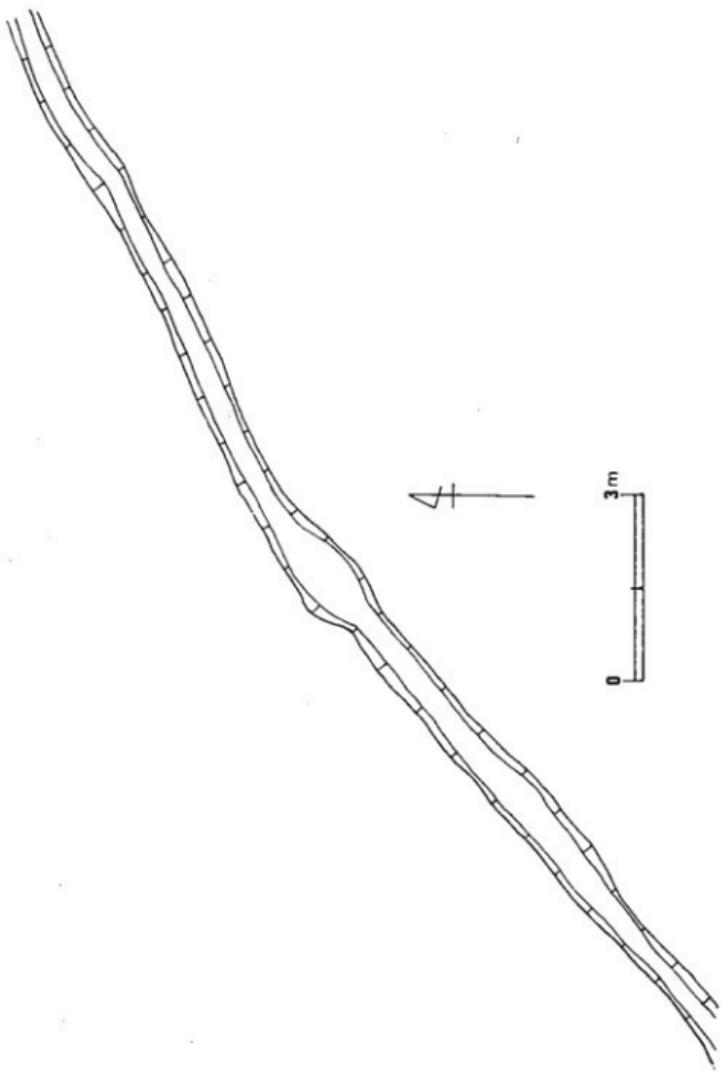
第6図 D地区 南壁断面図

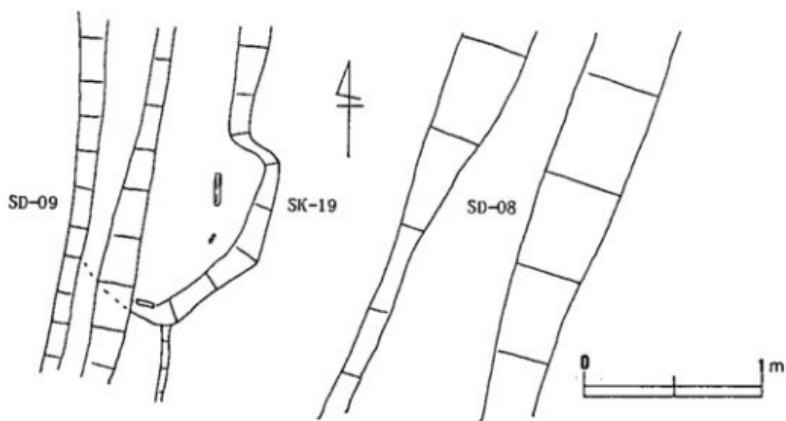




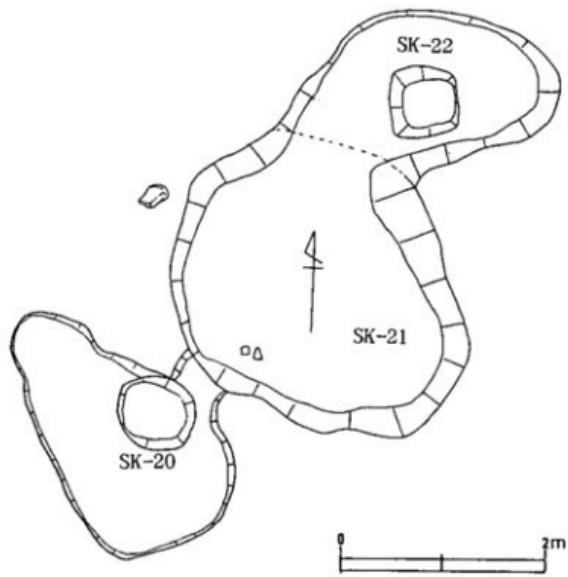
第8図 SD-08・09・10・11・12溝実測図

第9図 SD-13測定測図





第10図 SK-19 土壌実測図



第11図 5 K-20・21・22 土壌実測図

II 出土遺物

今回の発掘調査により検出された出土遺物としては、土製品類・金属製品類とともに瓦塊類などが存在する。

(1) 土 製 品 類

土製品類としては、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器（瓦質土器）・陶器・磁器・土錘・編羽口などがあげられる。

土 師 器

土師器は調査区全体から検出されており、出土遺物の整理が完了していないので詳細は不明であるが、供膳形態の杯・壺などを中心に若干の蓋杯・高杯などとともに、煮沸形態・調理形態の甕などが若干数認められる。

杯については、平底で高台が付かないもの（A類）と高台を貼り付けるもの（B類）とがあり、高台を判り出すもの（C類）は検出されていない。出土点数は少ない。

壺については、丸底のもの（A類）のものが大部分であり、高台を貼り付けるもの（B類）はほとんど検出されていない。

土師器の検出遺構としては、SD-08～SD-Bの溝、SK-20～SK-22の土塙などが存在する。

須 恵 器

須恵器も量的には少ないが、調査区全体から検出されている。器種としては、杯・杯・蓋壺・壺・甕など存在する。

須恵器の検出遺構としては、SD-08・09・13の溝、SK-21の土塙などがあげられる。

黒 色 土 器

出土点数は少ないが、高台を貼り付けた壺と思われるものが検出されている。

瓦 器

大部分が小破片であり、全体の形状を復元するのは困難なものが多いが、若干数の壺（高台付）と思われるものが検出されている。

磁 器

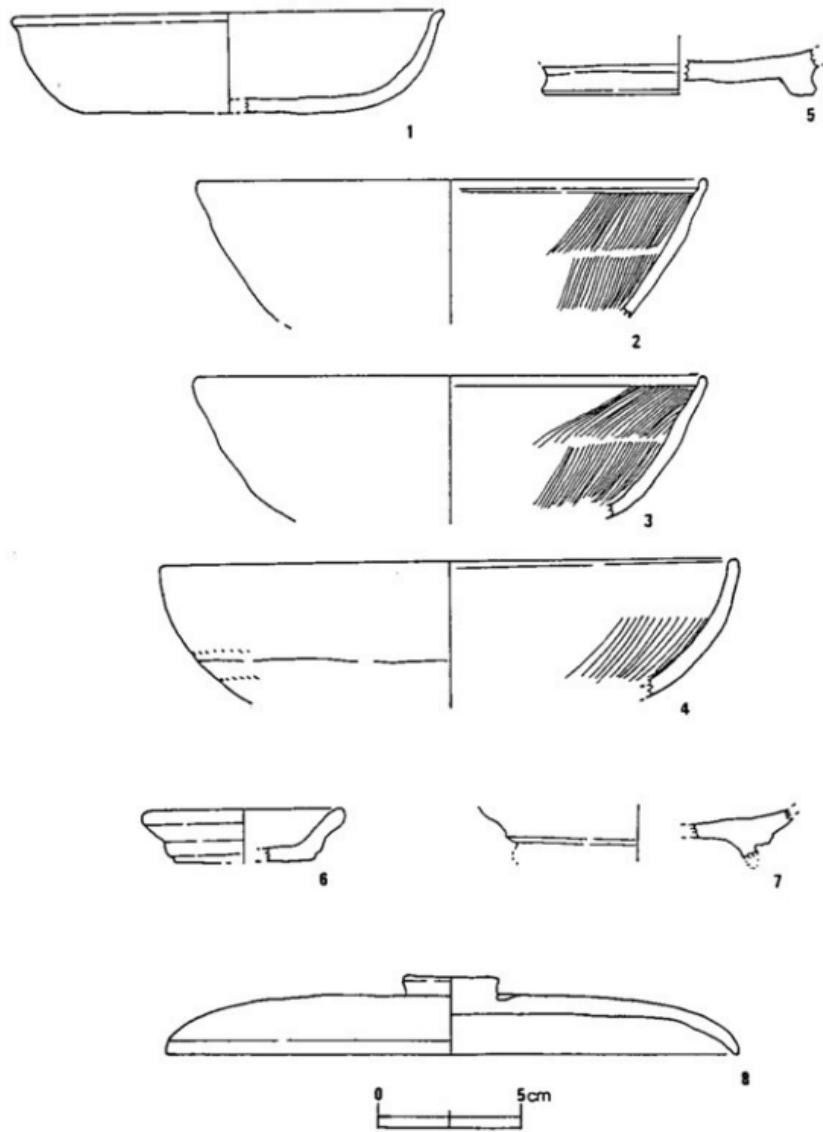
青・白磁片が出土しているが、出土点数は極少であり、いずれも小破片である。青磁としては碗と思われるもの、白磁としては碗と壺の破片と思われるものが検出されている。

土 錘

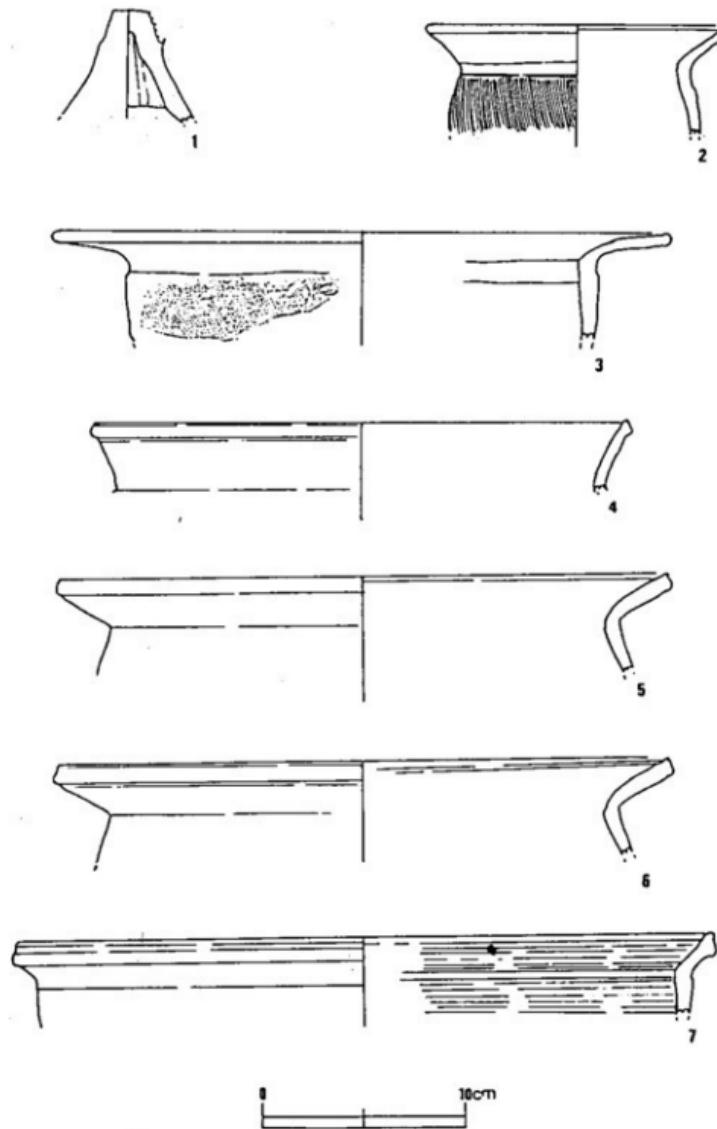
2点のみの出土であり、いずれも管状土錘であり、N2グリッドなどから検出されている。長さ4.7cmと1.8cmで、いずれも欠損品である。

編 羽 口

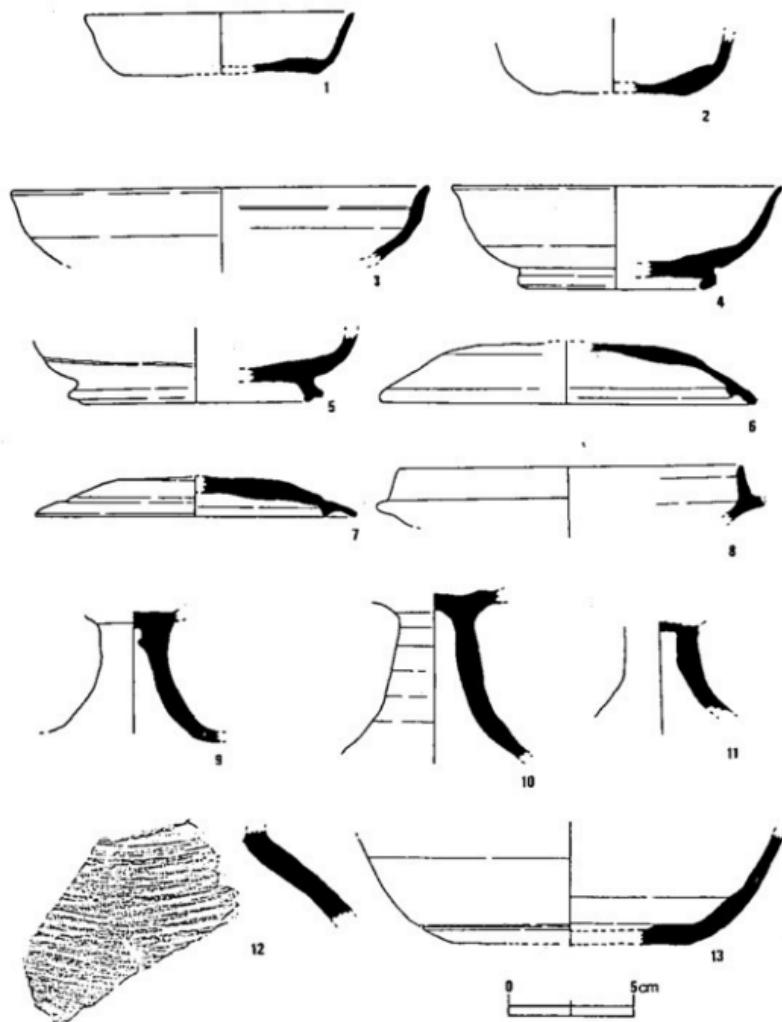
1点のみの出土であり、15グリッドから検出されたものである。長さ約8cmの半欠品であるが、比較的良好な残存状態となっている。



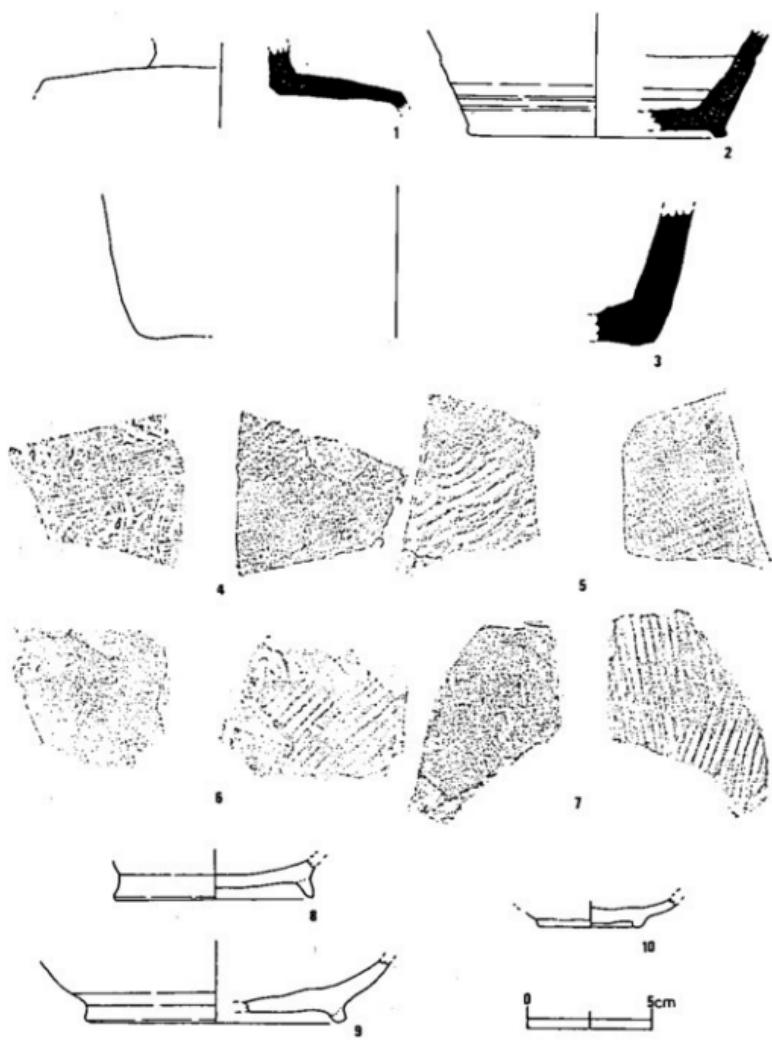
第12図 出土土師器実測図



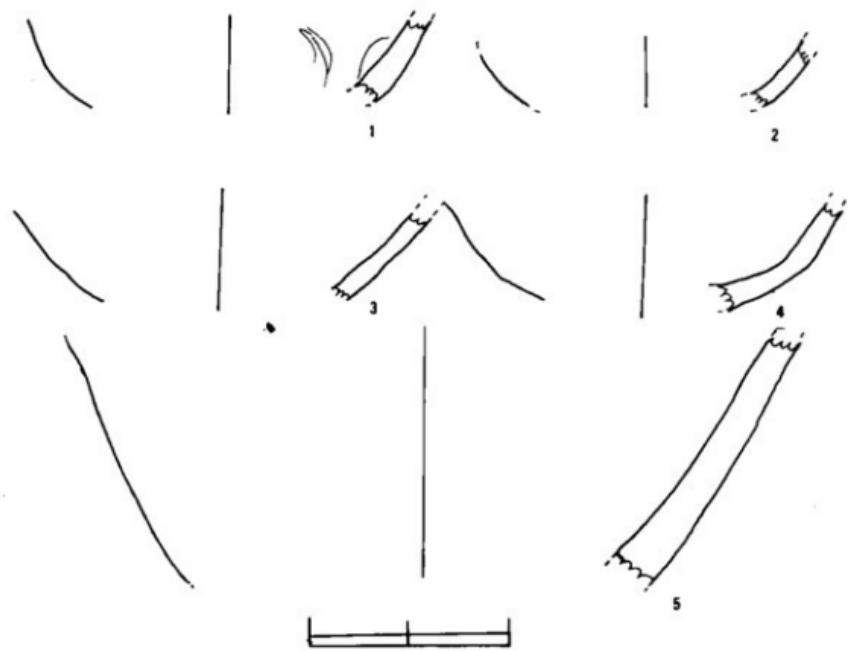
第13図 出土土師器実測図



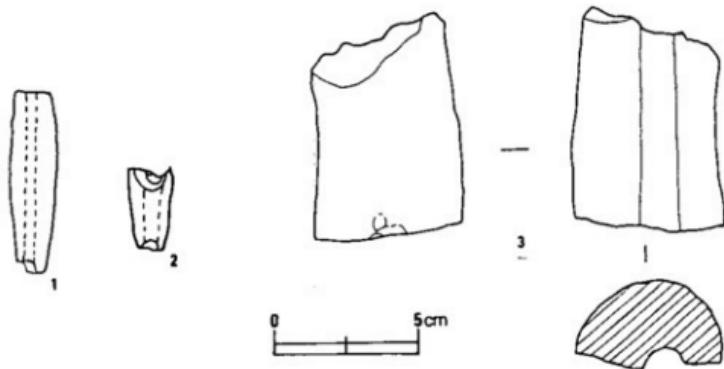
第14図 出土須恵器実測図



第15図 出土須恵器・黒色土器・瓦質土器・瓦器実測図



第16図 出土磁器実測図



第17図 出土土錐・輪羽口実測図

(2) 金 属 製 品 類

金属製品類としては、鉄斧・鉄刀子などの鉄製品と古銭などが検出されている程度である。

鉄 斧

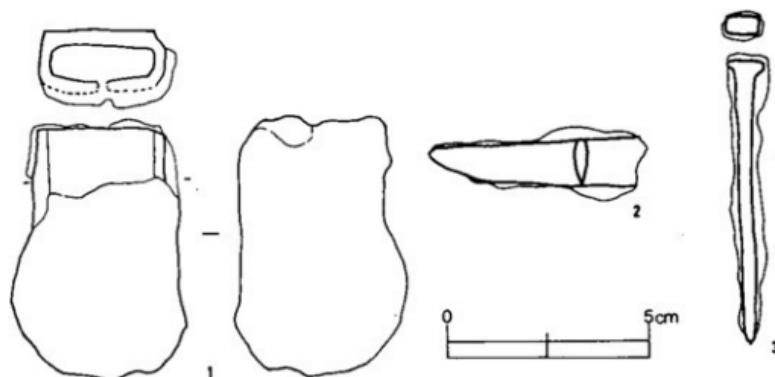
調査区の東端部やや北よりのP 4 グリッドで検出されたもので、長さ6.3cm、幅4.1cm、厚さ1.5cmの小品である。

鉄 刀 子

調査区の中央部やや西よりのE 5 グリッドの北壁に検出されたもので、現存長約3.7cm幅約0.8cm、厚さ約0.4cmで茎部及び身部の一部が欠損した半欠品である。

古 銭

H 5 グリッドから元祐元寶（篆書体 初鑄898年）の北宋銭とD 5 グリッドから大宋元寶（初鑄年）の南宋銭が検出されている。



第18図 出土鉄製品実測図



第19図 出土古銭折影図

1 元祐通寶

2 大宋元寶

(3) 瓦 塼 類

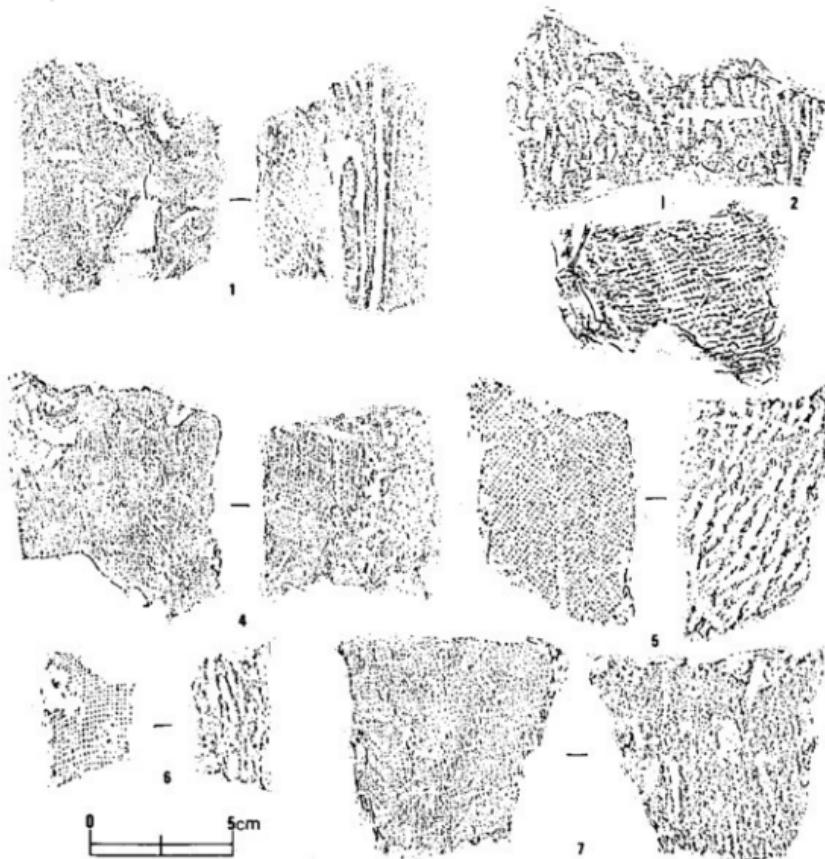
瓦塼類としては、SD-11などの上面を中心に、丸瓦・平瓦の破片が若干数検出されている。

丸 瓦

凸面が無文のもの（A類）と粗雑な撋印目文を配したもの（B類）が存在する。前者は、凹面の布目痕は比較的細かく、後者はやや荒くなっている。数点のみの出土である。

平 瓦

小破片が大部分であり、全体の形状を知るものは検出されていないが、凸面にやや粗雑な撋印目文を配し、凹面に比較的細かい布目痕を有するものが検出されている。数点のみの出土である。



第20図 出土丸瓦・平瓦拓影図

第4章 小 結

今回の調査目的は、阿波国府跡の政庁跡であり、従来より西政庁跡と推定されている大御和神社の周辺部の調査を実施した。ここでは、今回の発掘調査の成果等に関連した問題点をあげて、小結としたい。なお、国府・国衙・政庁等の概念については、中山敏史氏の指摘に従っておきたい。⁽¹⁾

① 立地条件に関する諸問題

阿波国府跡については、藤岡謙二郎氏の指摘される「臨海または河口の沖積三角州や海岸段丘」という立地条件が与えられる。⁽²⁾

大御和神社周辺を中心に展開したとすれば、海拔7m前後となり、阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡より約3～4m低い立地条件を示している。

② 府域及び位置に関する諸問題

阿波国府跡については、従来の歴史地理学的研究の成果より、大御和神社が西政庁跡、道路をはさんで東側の千幅寺（千坊）が東政庁跡と考えられてきた。⁽³⁾また、前述したごとく、米倉二郎氏によれば、初期の阿波国府の政庁一条里地割に一致する一が大御和神社境内を中心とし、後期の阿波の政庁一正方位地割に一致する一が圓鉄島本線府中駅の西方約200mの地点とされ、初期（中国の時代）は6町四方、後期（上國の時代）は8町四方になったことが指摘されている。⁽⁴⁾

面積的に非常に狭い範囲の調査であるため再検討の余地を有しているが、第1次調査及び今回の調査とともに周辺部の発掘調査・分布調査等の成果を考慮してみると、阿波国府の政庁が大御和神社よりさらに西方に位置していた可能性も有し、今後の研究課題である。

③ 国衙及び政庁の建物等に関する諸問題

国府の建物については、文献面より、国司館舎をはじめ、税所・大帳所・調所・朝集所・健兒所・国掌所・田文所・公文所・辨済所等の官舎とともに、学館・倉等の存在が指摘されている。⁽⁵⁾

全国の国府跡の発掘調査等による考古学的成果より、政庁の建物には正殿（前殿）・後殿・東隣殿・西隣殿・東門・西門・南門・北門等とともに雑舎的な建物である倉庫などの存在が知られている。⁽⁶⁾

これらの調査成果より、建物の配置形態は個々の遺構の成立年代は相異しているが、正殿の東西両翼に脇殿を配し、後殿を加え、これらの建物を築地塀で取り囲んで中庭を形成するという原則の存在も指摘されている。さらに、その変遷過程は掘立柱建物から礎石建物へ、正殿と東・西隣殿のみの構成から後殿その他を加えて機能が拡大化していくことも指摘される。⁽⁷⁾

阿波国府の場合も、同様の変遷過程をたどるものと思われるが、今回の調査及び第1・2次調査で検出された遺構は、阿波国府の府域などを考える上で重要なものと思われ、今後の調査の成果に期待したい。

④ 条里地割に関する諸問題

阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡の場合は、条里地割との密接な関連が指摘できる。

阿波国府跡については、前述のごとく、府域等について条里地割との一致などが歴史地理学的研究成果より指摘されている。¹⁸⁾

大御和神社の周辺における条里の南北地割については、真北より西へ約11度ふれており、阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡などの周辺と同一であるが、大御和神社の東方では真北より西へ約15度ふれる条里地割が存在している。時期・地域差により条里地割の相異が存在したと思われ、阿波国府の政庁位置などを策定する上で注意される。

⑤ 検出遺構に関する諸問題

検出遺構としては、前述のごとく、溝・土壌（土塙墓）などがあげられる。

溝については、建物に付属する可能性も有すると思われるSD-08～SD-11などが存在する。いずれも部分的な検出のため、阿波国府に関連する遺構と特定できなかった。

SD-08～SD-12については、平安時代前期～後期、SD-13については、奈良時代後期以降に比定されるものと思われる。

土壌（土塙墓）については、SK-19～SK-22などが存在する。

SK-19は、人骨と思われるものが埋納された土塙墓であり、年代的には、平安時代後期以降に比定され、SK-20～SK-22については、奈良時代後期以降に比定されるものと思われる。

⑥ 出土遺物に関する諸問題

出土遺物としては、前述のごとく、土製品類—土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・磁器・土錘・繩目口など、金属製品類—鉄斧・鉄刀子・古銭など、瓦塼類—丸瓦・平瓦などがあげられる。

いずれも出土点数も少なく、小破片が大部分であるが、SD-12・SK-21などから検出されている土師器・須恵器以外は平安時代以降に比定されるものが大部分である。

⑦ 存続年代に関する諸問題

阿波国府については、今回検出された溝などとともに、従来検出されている掘立柱建物・柱列・溝なども阿波国府の政庁などに関連する遺構と特定化できなかったので詳細は不明であるが、平安時代末期頃までは存続したものと思われる。

国府については、3～5時期の変遷が考えられており、阿波においては、米倉二郎氏により大きく2時期の区分が指摘されているが、細分化も可能と思われる。

現在までに、明確に奈良時代まで遡る遺構は、今回検出された溝・土壌などのみであり、今後の研究課題である。

註

- (1) 山中敏史「国府・郡衙跡調査研究の歴史」『仏教芸術』124 1979. 5
- (2) 藤岡誠二郎「国府の地理的・地形的位置」『国府』 1971. 12

- (3) 木下 良「国府と条里との関係について」『史林』50巻5号 1967. 9
- (4) 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」『史林』66巻1号 1983. 1
- (5) 丸茂武重「国府・郡家の建物について一律令制におけるー」『国学院雑誌』第62巻第9号 1961. 9
- (6) 防府市教育委員会『周防の国衙』 1967. 3
宮城県教育委員会「多賀城跡 昭和44~57年度発掘調査概報」 1970. 3~1983. 3
松江市教育委員会「出雲国庁跡発掘調査概報」 1971. 3
酒田市教育委員会「城輪柵跡第二次調査概報」 1971. 3
倉吉市教育委員会「伯耆国庁跡発掘調査概報(第3次)~(第6次)」 1976. 3~1979. 3
久留米市教育委員会「筑後国府(Ⅰ)・(Ⅱ)」『久留米市文化財調査報告書』第12・13集 1976. 3・1977. 3
滋賀県教育委員会「史跡近江国衙跡発掘調査報告」「滋賀県文化財調査報告書」第6集 1977. 3
佐賀県教育委員会「肥前国府跡I(第1次~第3次)」1978. 3
栃木県教育委員会「下野国府跡I・II・III」『栃木県埋蔵文化財調査報告書』第30・35・42集 1979. 3・1980. 3・1981. 3
- (7) 松本長三郎「高瀬遺跡・じょうべのま遺跡をめぐって 第1章 建築よりみた二つの遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ 1974. 3
- (8) 福井好行「阿波の国府と其附近の条里」『徳島大学学芸学部紀要』社会科学9 1959. 9
木下 良「国府と条里との関係について」『史林』50巻5号 1967. 9
米倉二郎「国の昇格と国府の変容」『史林』66巻1号 1983. 1

図 版

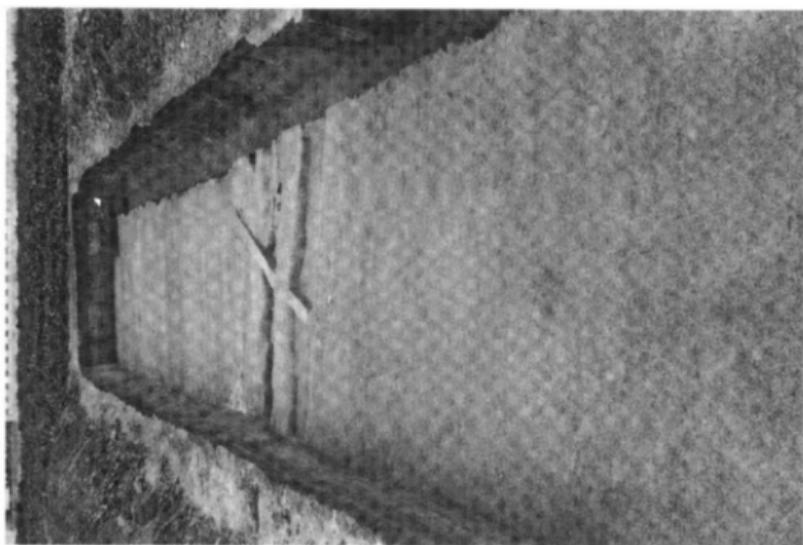
調査地点周辺現況





D地区調査地点遠景

(北より)



D地区検出遺構北半部

(東より)



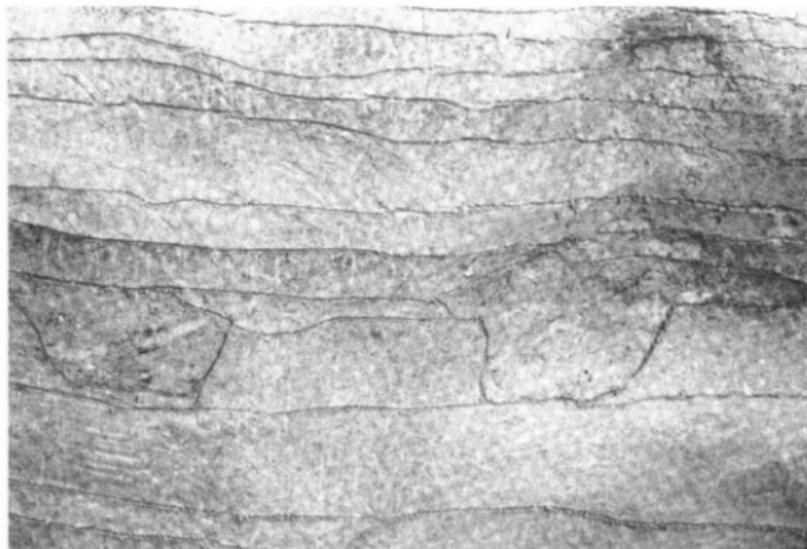
D地区検出遺構北半部

(東より)



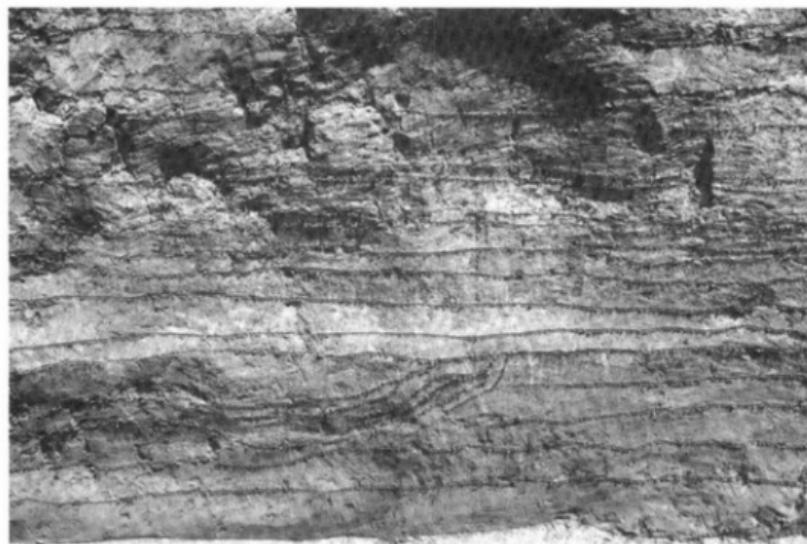
D地区検出遺構南半部

(東より)



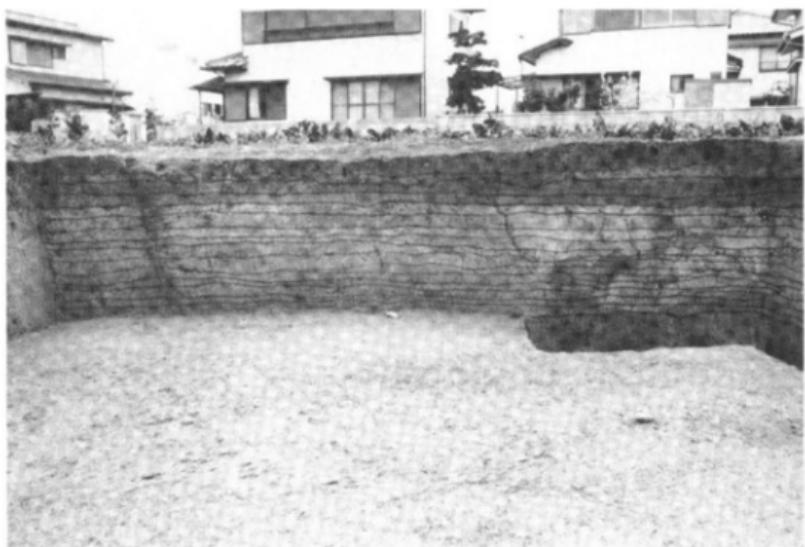
D地区東壁北半部

(西より)



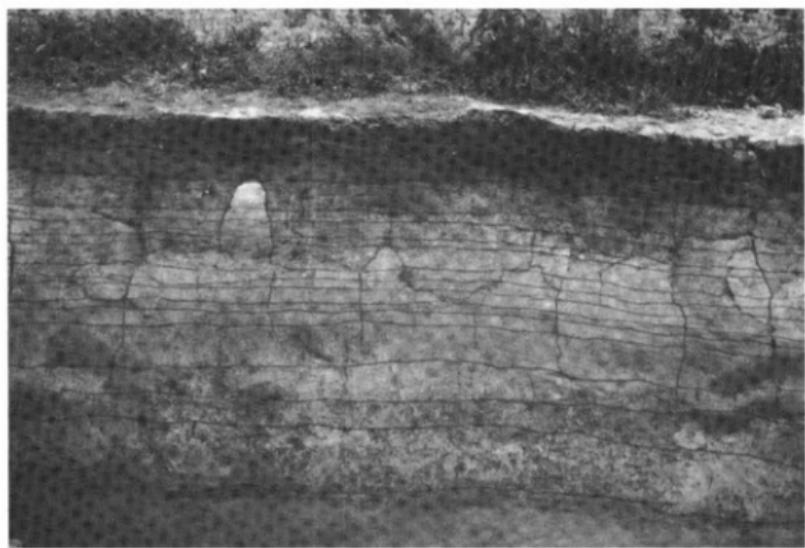
D地区東壁南半部

(西より)



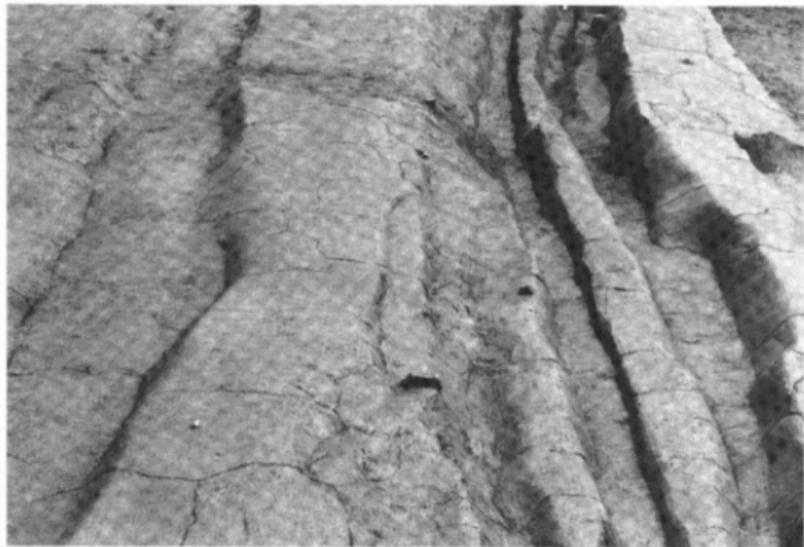
D地区西壁北半部

(東より)



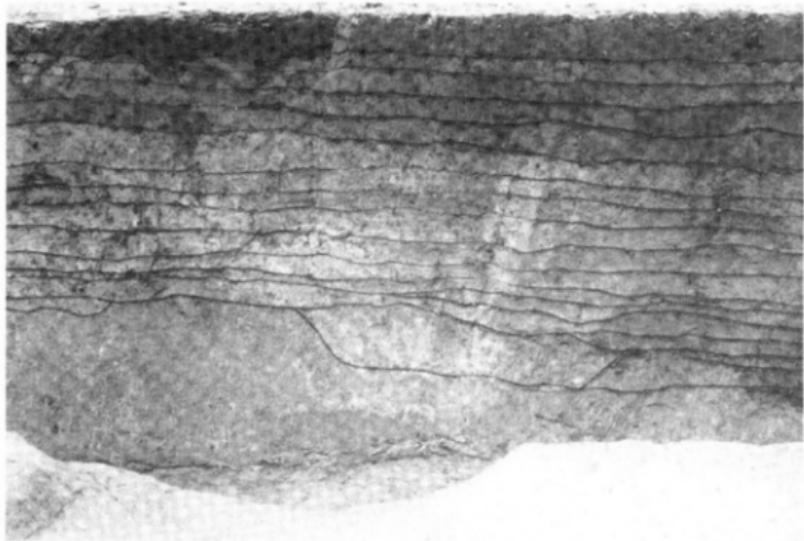
D地区西壁南半部

(東より)



SD-08・09・10・11・12 溝

(北より)



D 地区北壁 (SD-08 溝) 土層

(南より)



D 地区北壁 (SD-09・10・11 溝) 土層

(南より)

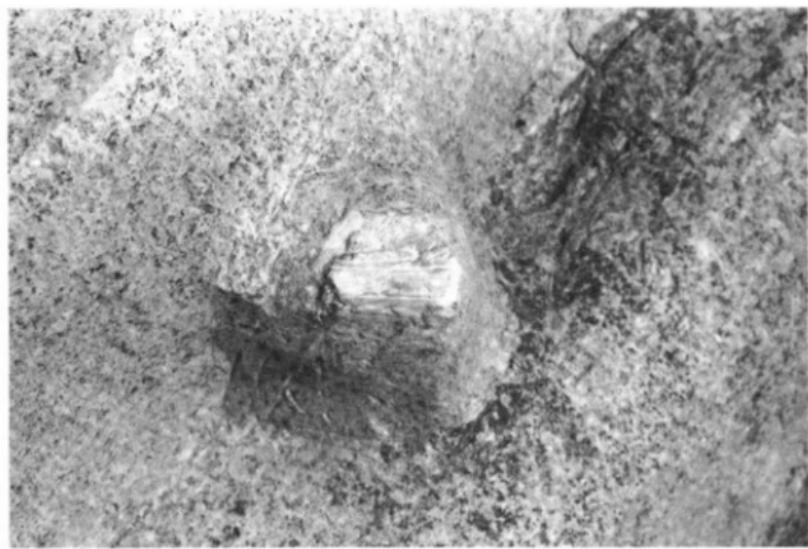


SD-09 溝 須恵器出土状態

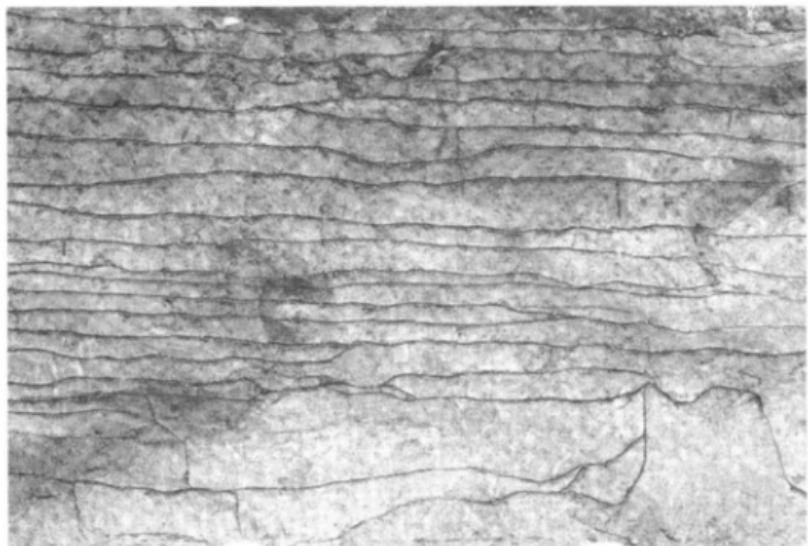


SD-10・11溝 上層

(南より)

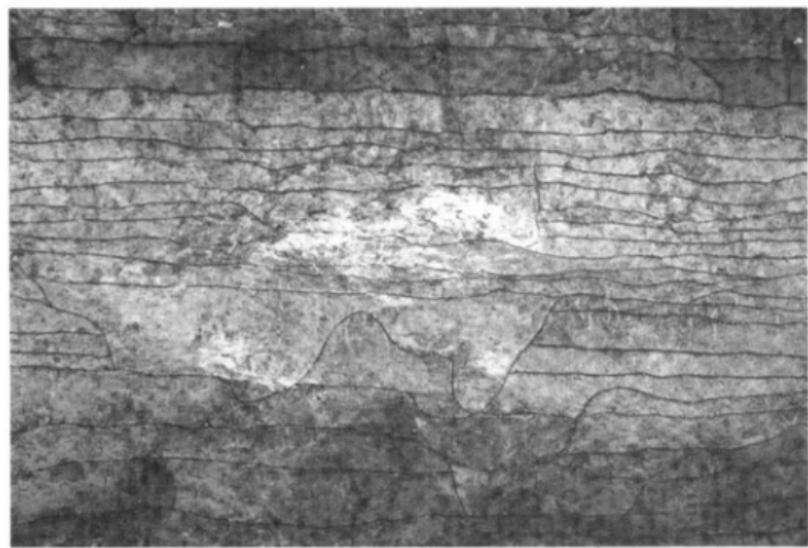


SD-11溝 丸瓦出土状態



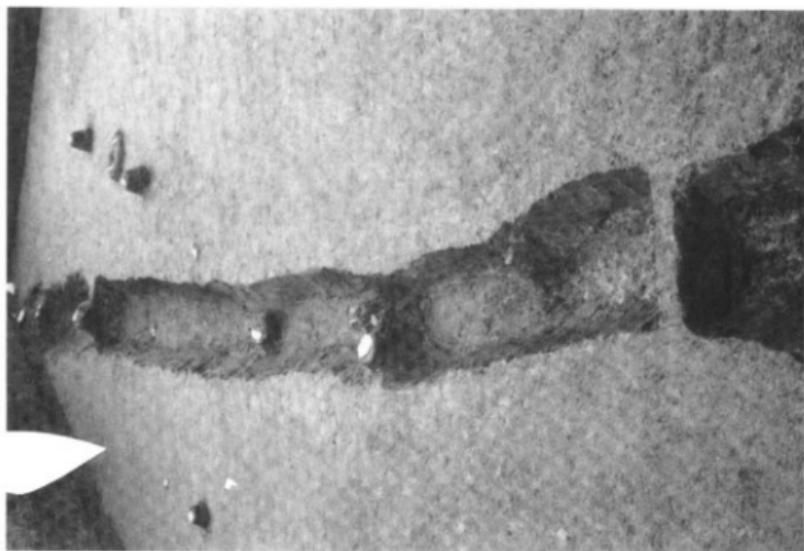
D地区北壁 (SD-12溝) 土層

(南より)



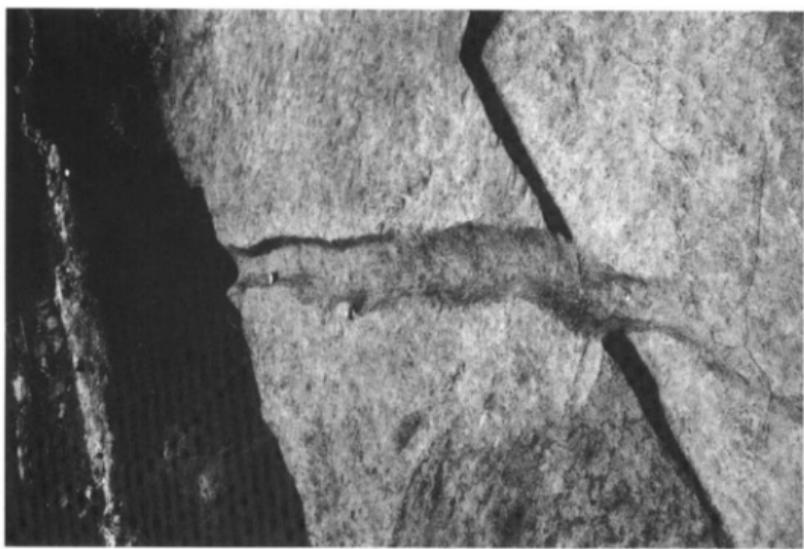
D地区南壁土層

(北より)



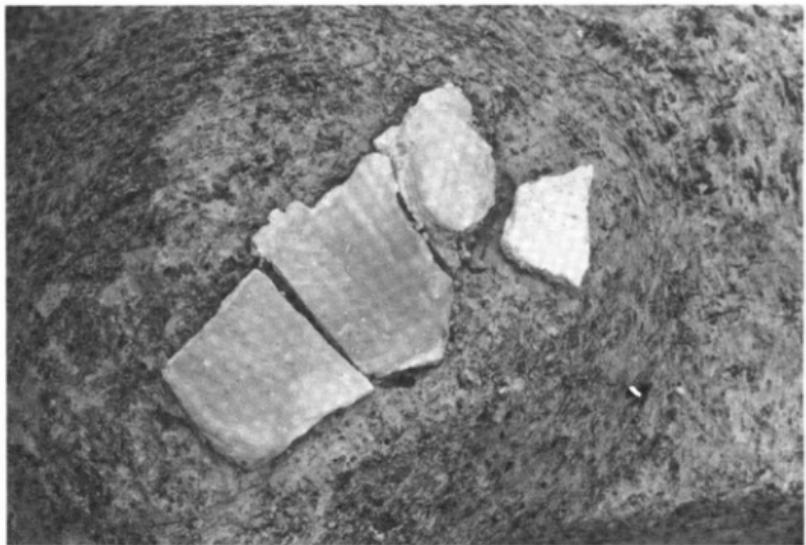
SD-13溝北東半部

北東より



SD-13溝南西半部

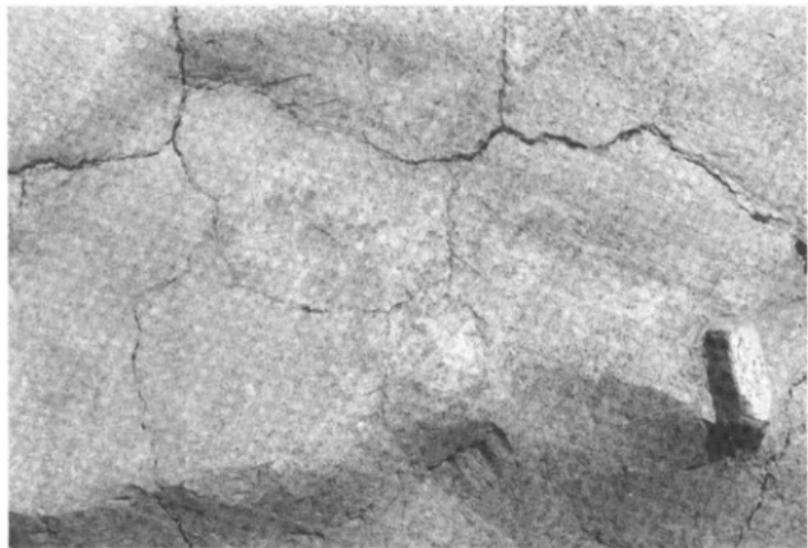
北東より



SD-13溝 土師器出土状態

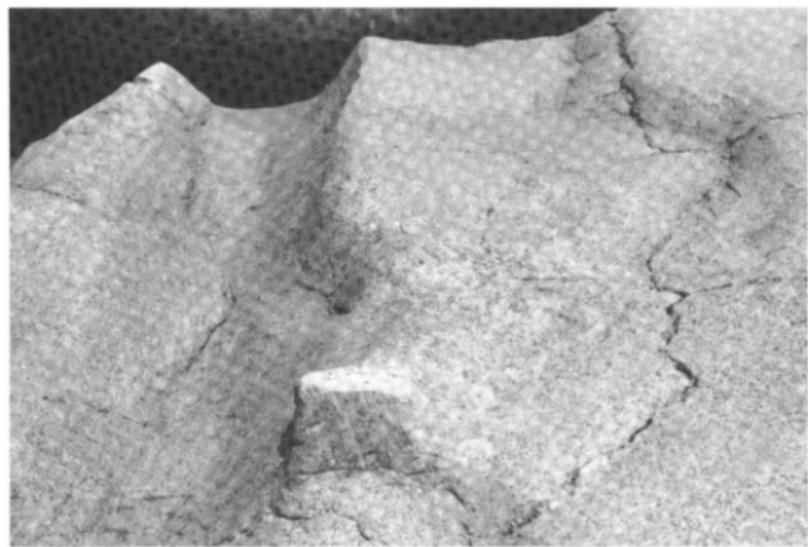


SD-13溝 須恵器出土状態



SK-19 土塚墓

(西より)



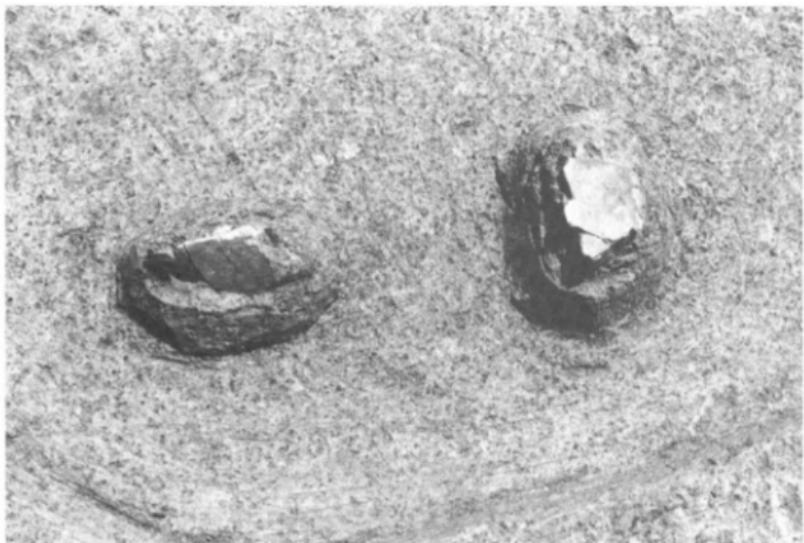
SK-19 土塚墓

(南より)

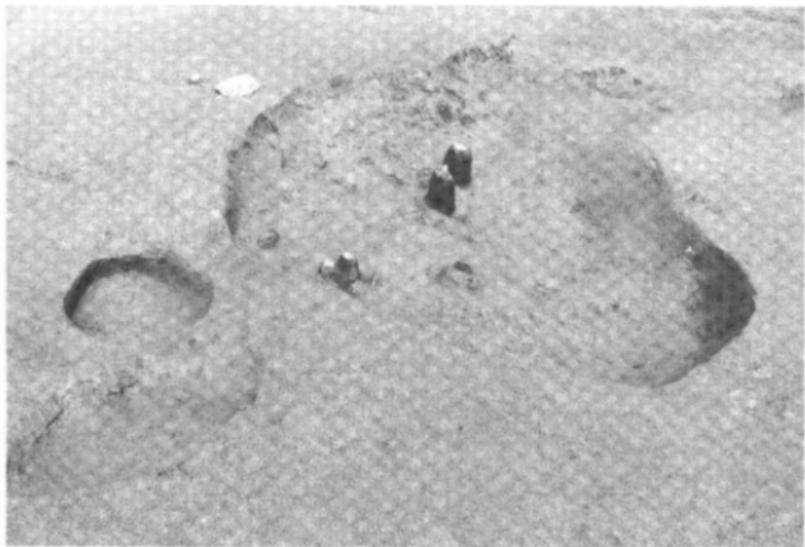


S K - 20 土壌

南東より

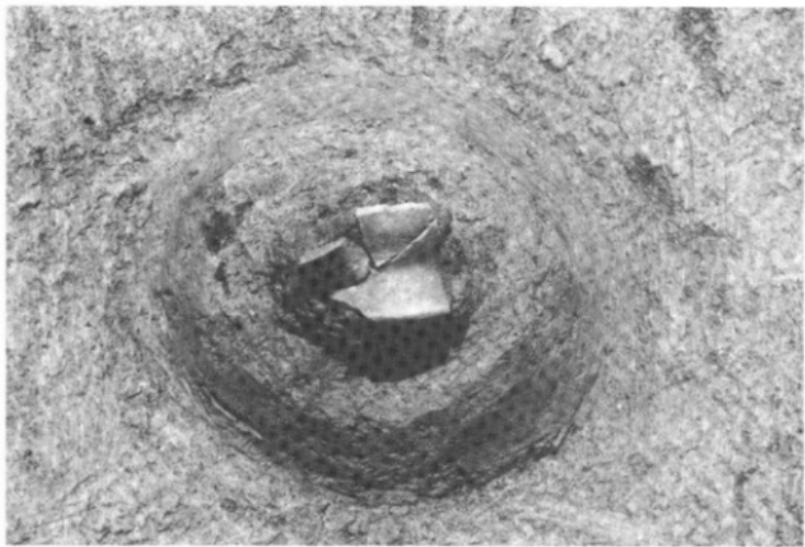


S K - 20 土壌土師器出土状態



SK-21 土 塚

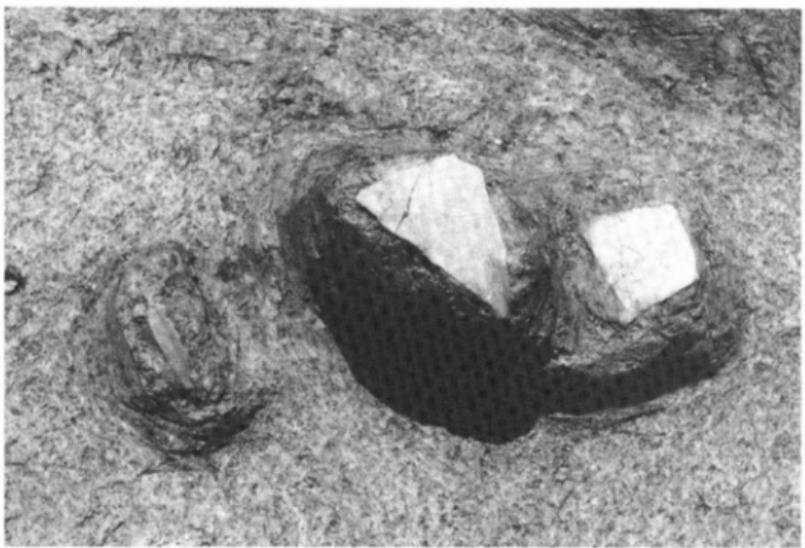
(南東より)



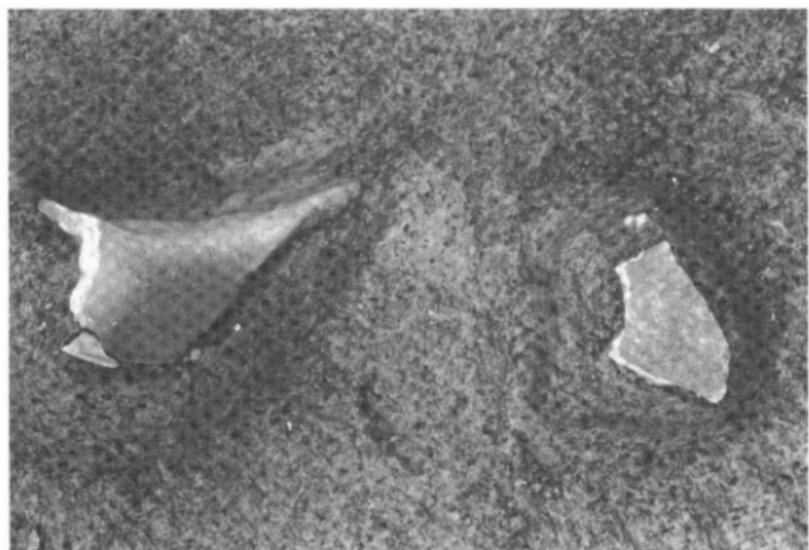
SK-21 土 塚 土師器出土状態



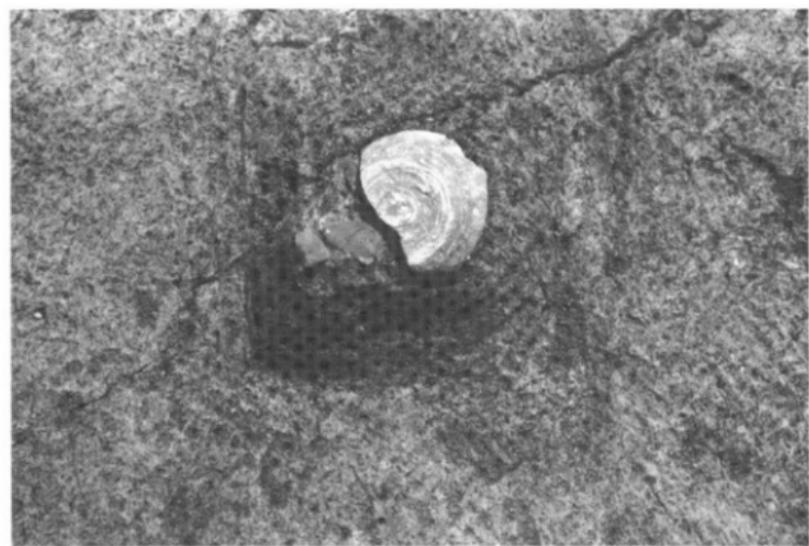
SK-21 土 塚 須恵器出土状態



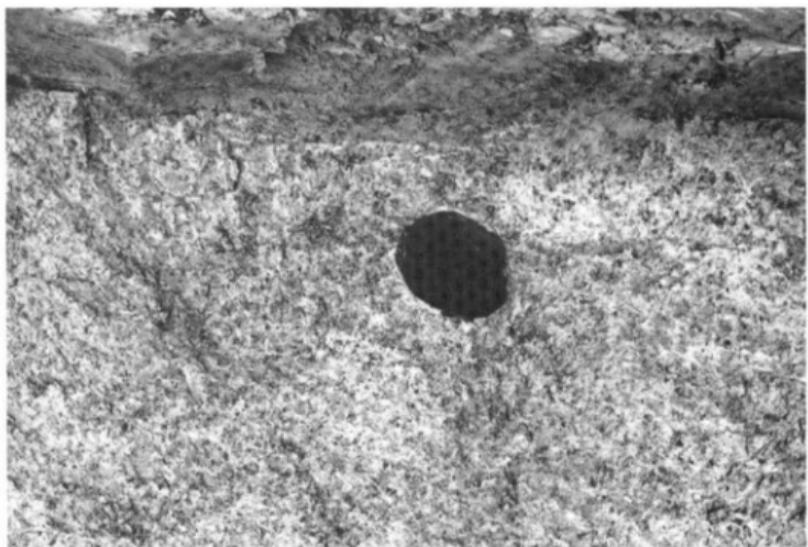
SK-21 土 塚 土器出土状態



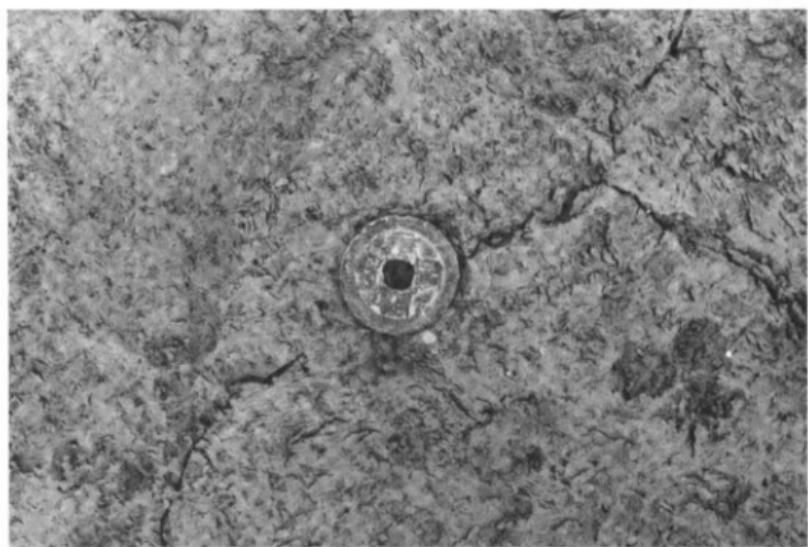
D地区M 5 グリッド 土師器出土状態



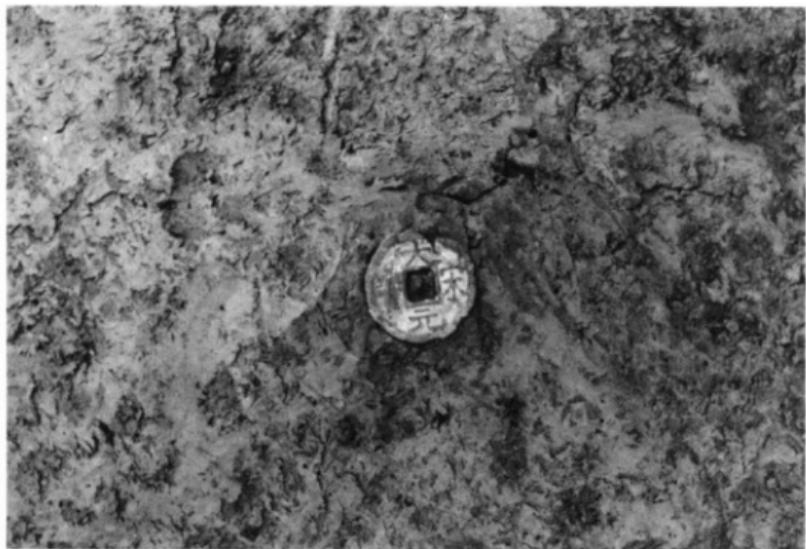
D地区P 3 グリッド 土師器・須恵器出土状態



D地区K 4 グリッド 黒色土器出土状態



D地区H 5 グリッド 元祐通寶出土状態

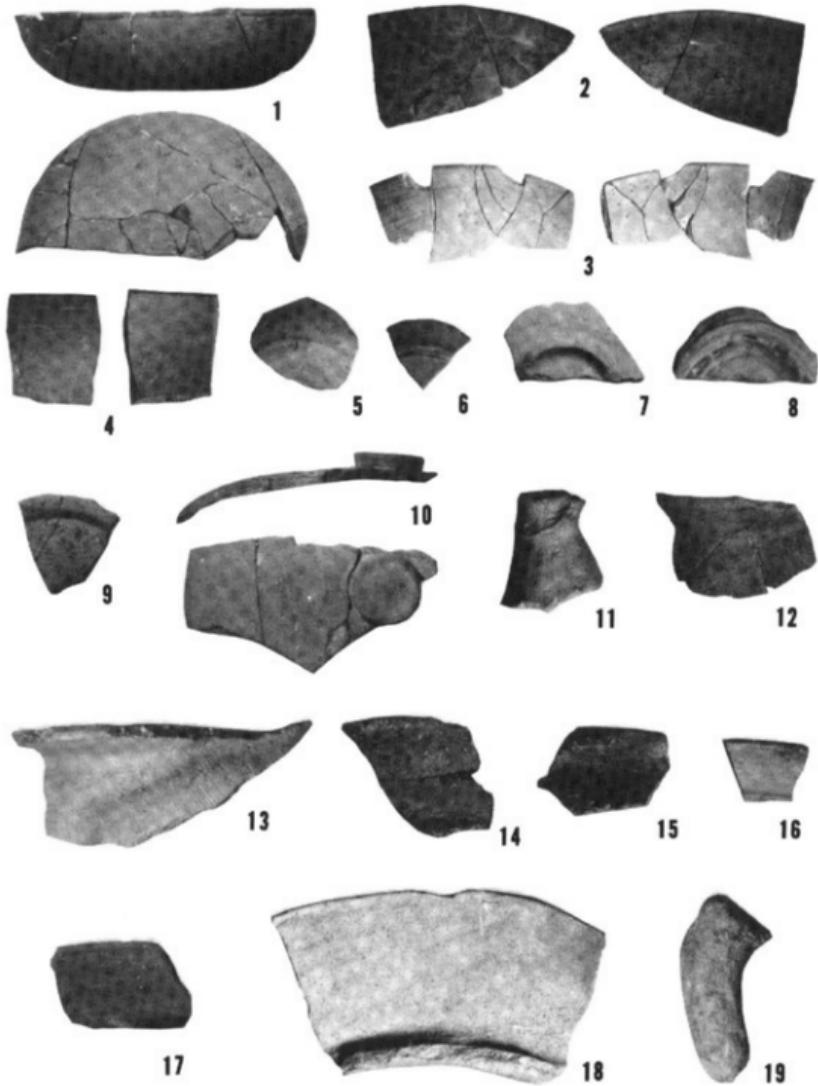


D地区D 5 グリッド 大宋元寶出土状態



D地区N 5 グリッド 丸瓦出土状態

図版19



出 土 土 師 器

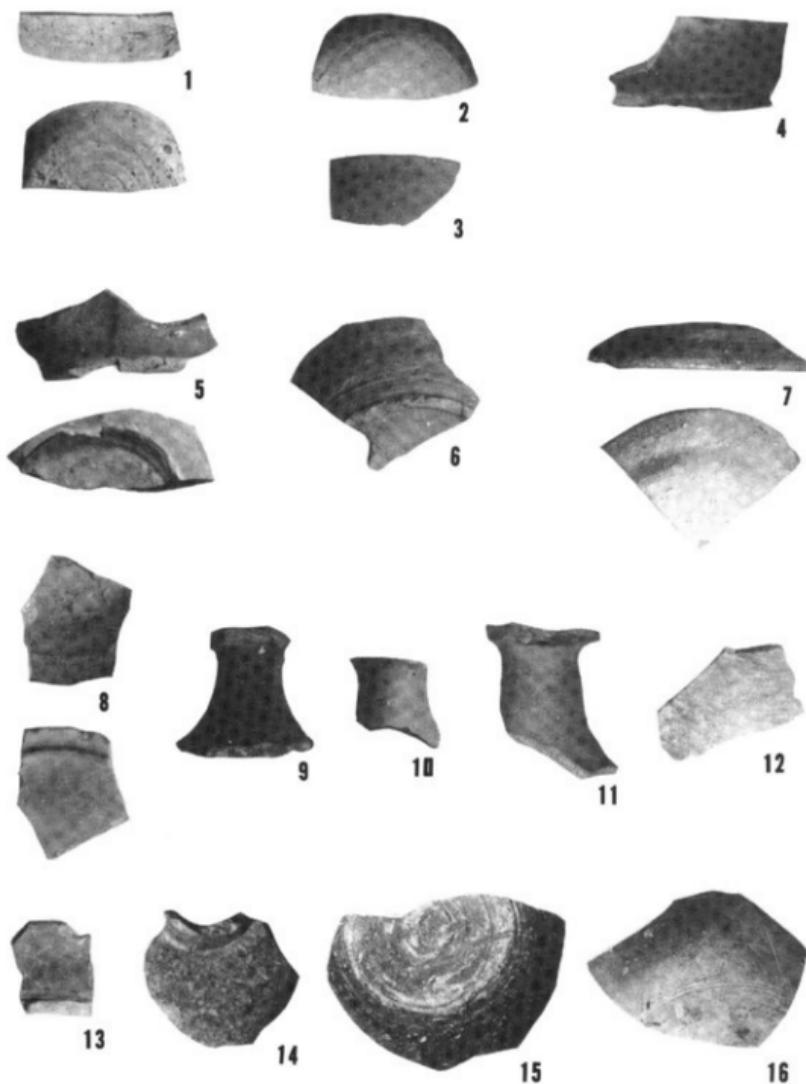
1・18 SD-13
7・11-15 D地区

2・4・12 SK-21
8・13-16 M5

3 O2
9-10-14 N5

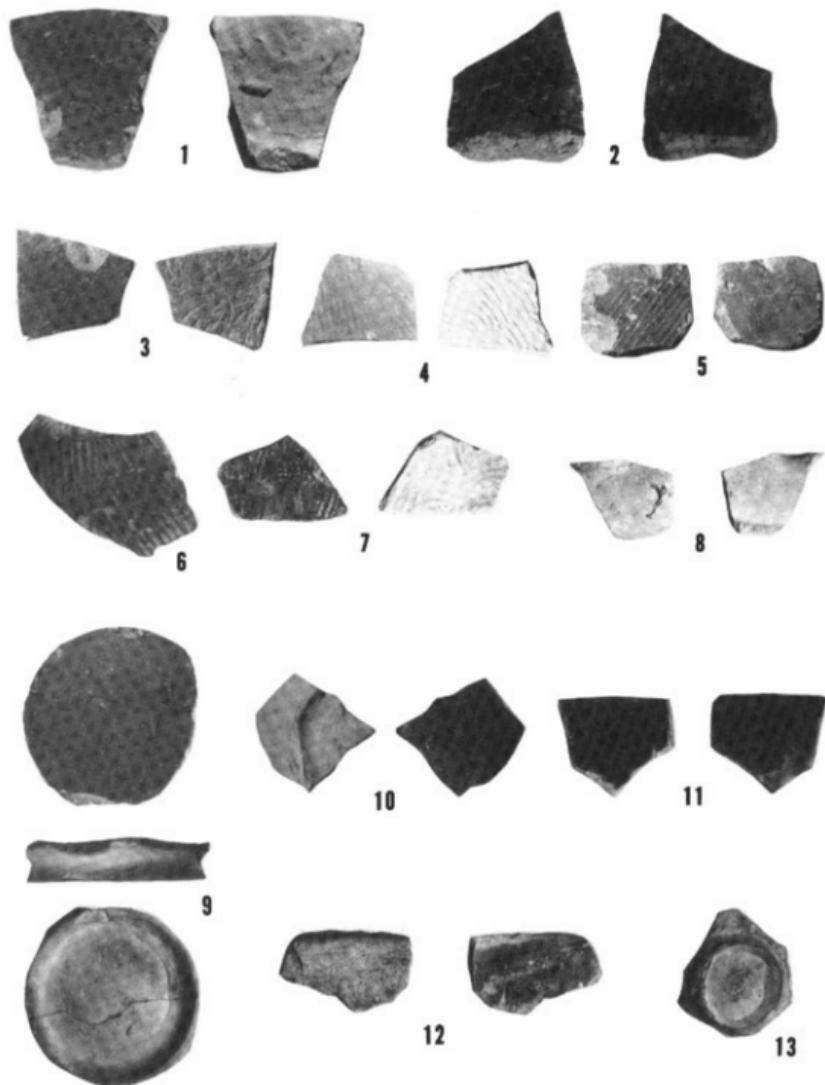
5・19 L5

6・17 J5



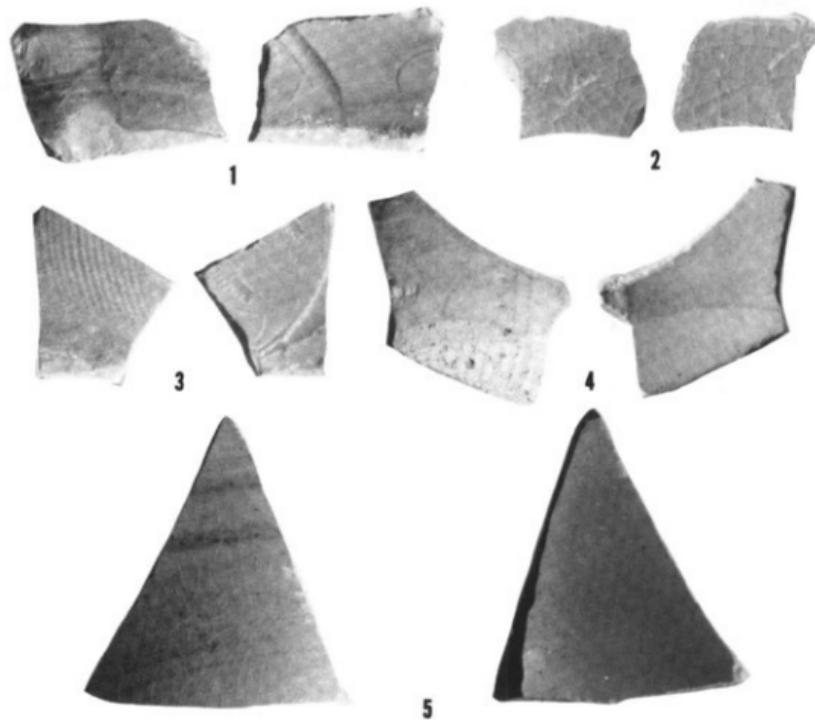
出 土 須 惠 器

1 N5	2 M3	3 SD-12	4·7·10 SK-21	5·10·11 D地区	6·16 M5
8 SD-08	9 SD-09	12 P5	14 H5	15 P3	



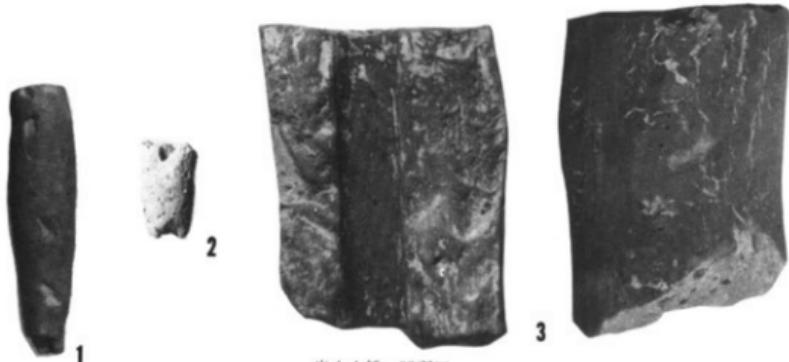
出土須恵器・黒色土器・瓦質土器・瓦器

1 ~ 8 須恵器	9 ~ 11 黒色土器	11 ~ 12 瓦質土器	13 瓦 器
1 SD-13	2 K5	3 I5	4 L2
7 -10-11-13 D地区	8 P4	9 K4	5 M5
		12 F4	6 O5



出土 磁器

1 青磁 P5 2 青磁 F5 3 青磁 N-5 4 白磁 N5 5 白磁 D地区



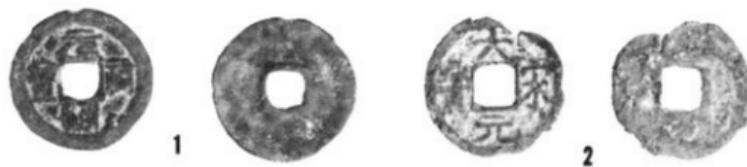
出土土鍾・甌羽口

1 土鍾 D地区 2 土鍾 N2 3 甌羽口 I5



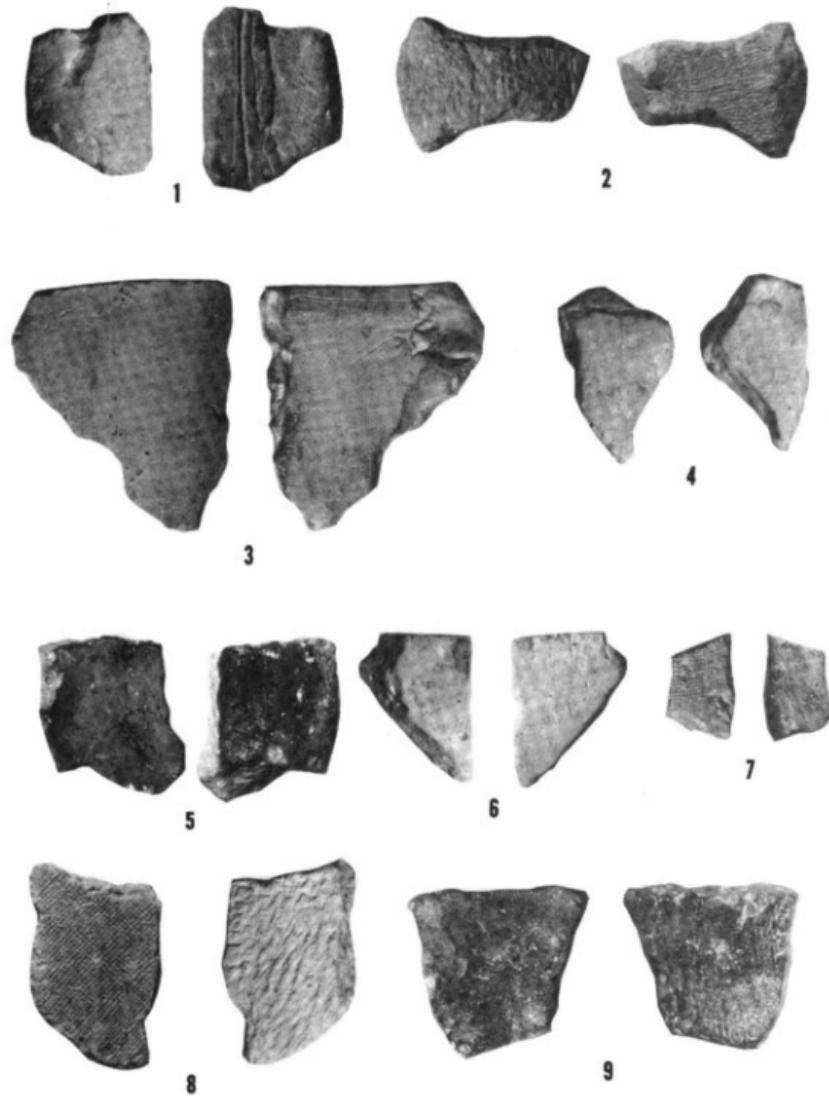
1 P4 2 N5 3·4 E5 5 F5 6 P5

出 土 鐵 製 品



出 土 古 錢

1 元祐通寶 H5 2 大宋元寶 D5



出土九瓦·平瓦

1~6 九瓦
7~9 平瓦

1 SD-13
7~8 H5

2~3 K5
9 D地区

4 N5

5 P4

6 15

徳島市埋蔵文化財調査報告書第14集

阿波国府跡第3次調査概報

— 1984年度 —

昭和60年3月31日

編集 徳島市教育委員会社会教育課

発行 徳島市教育委員会

印刷 グランド印刷

